

瀬戸大橋開通 20 周年記念事業



岡山・香川合同企画文化交流展

# 事業活動報告書

－ 3 年間のあゆみ－



岡山・香川合同企画文化交流展実行委員会





平成 18 年度 交流展

岡山会場



展示風景

●主な展示資料



高松城下図屏風  
香川県立ミュージアム 蔵

色絵金葵唐草文水指  
紀太理兵衛 作  
香川県立ミュージアム 保管



香川会場



特別解説 (伊勢崎 淳氏)



角花生 伊勢崎 淳 作  
個人蔵



緋襷大徳利  
岡山県立博物館 蔵

平成 19 年度 交流展

岡山会場



記念講演会 (四辻秀紀氏)

●主な展示資料



藤原佐理筆詩懷紙〔国宝〕  
香川県立ミュージアム 蔵



雑道具  
香川県立ミュージアム 保管

香川会場



学芸員によるミュージアムトーク



太刀 銘 則宗〔重要文化財〕 岡山県立博物館 蔵



金塵地家紋散糸巻太刀拵 岡山県立博物館 蔵



平成 20 年度 合同企画文化交流展

香川会場



開展式

岡山会場



学芸員による展示解説



講演会（樋田豊次郎氏）



特別解説（山口松太氏）

● 主な展示資料



彩色蒔醬 料紙硯匣 玉楮象谷 作  
香川県立ミュージアム 蔵



双色紙笥 喜鵲之図 磯井如真 作  
香川県立ミュージアム 蔵



穂落之図 鶴香炉 亀香盆  
正阿弥勝義 作  
岡山県立美術館 蔵



藍胎蒔醬 盛器「熟帯魚」  
太田 儔 作  
香川県立ミュージアム 蔵



蒔醬存清 林間飛翔 箱 磯井正美 作  
香川県立ミュージアム 蔵



備前三角播座花入  
金重陶陽 作  
岡山県立美術館 蔵



乾漆堆錦箱「古陵想」 山口松太 作  
文化庁 蔵



備前黒角皿 伊勢崎 淳 作  
東京国立近代美術館 蔵

平成 18 年度 ボランティア交流事業



ボランティア交流会（備前市伊部周辺）



ボランティアガイド（香川会場）

平成 19 年度 ボランティア交流事業



ボランティア交流会（高松市 栗林公園）



ボランティアガイド（岡山会場）

平成 20 年度 ボランティア交流事業



ボランティア交流会（倉敷市立磯崎眠亀記念館）



ボランティア交流会（香川県漆芸研究所）



ボランティアガイド（香川会場）



ボランティアによる体験学習の支援（岡山会場）



香川会場

「漆芸の体験学習」



児童の作品



岡山会場

「陶芸の体験学習」



児童の作品



瀬戸大橋開通 20 周年記念事業 

岡山・香川合同企画文化交流展

# 事業活動報告書

— 3 年間のあゆみ —



## ごあいさつ



岡山県知事 石井正弘

岡山県と香川県は、古くから瀬戸内海を軸として、歴史的・文化的に深い結びつきがありました。この両県の間を生活・文化・産業・経済・観光など、あらゆる分野においてさらに密接なものにしたのが、昭和63年4月に開通した瀬戸大橋です。

その瀬戸大橋が開通20周年の節目を迎えることを記念して、両県立の博物館が相互に連携し、平成18年から20年にかけて両館収蔵品の交換展示や両館協働の交流展示を行ってきました。この事業を通して、岡山県・香川県の皆様に相互の文化に対する理解を深めていただくとともに、両県の魅力を全国に向けて発信することができました。また、本事業により、両館職員やボランティアの交流が進み、学校教育と連携した取組みも行うことができたことは、今後の両県の文化振興において大きな力になるものと確信しております。

本県では、平成22年秋に開催する「第25回国民文化祭・おかやま2010」を契機として、本県の文化のさらなる発展を図るため、岡山県文化振興基本条例に基づき「おかやま文化振興ビジョン」を策定したところであります。この機会に両県の歴史と文化を情報発信できたことで、文化振興にも寄与できたものと考えております。

発刊にあたり、格別の御支援、御協力を賜りました関係の皆様方に深く感謝いたしますとともに、瀬戸大橋で結ばれた両県がますます交流を深め、中四国の拠点としてともに発展していくことを願いたします。



## ごあいさつ



香川県知事 真鍋 武紀

平成 20 年 4 月、瀬戸大橋が開通 20 周年を迎えました。この間、橋で結ばれた本州と四国の間では、経済、観光、生活、文化など様々な分野の交流が飛躍的に拡大し、社会経済の発展に多大な効果をもたらしました。香川県では、この記念すべき開通 20 周年を祝し、岡山県や関係団体の皆様と連携して、記念事業を計画、実施してまいりました。

その一つとして、香川・岡山両県で取り組んだ文化交流事業では、平成 18、19 年度に、両県の博物館の所蔵資料を相互に交換して展示する展覧会を、そして平成 20 年度には両県の合同企画による特別展「備讃における工芸のあゆみ」を開催いたしました。香川県を代表する工芸である漆芸作品をこれほど大規模に他県で公開したことはこれまでになく、本県にとって画期的な取り組みでした。

岡山の文化関係者からは「今後も様々な香川の漆芸作品を紹介してほしい」との御意見もいただくなど、3 年間にわたる文化交流事業を通して、両県の県民の皆様が互いの文化を深く知り、また、自県の文化を見つめ直す機会ともなりました。さらに、ガイドを務められたボランティアの方々からは、「これからもこういった交流を続けていきたい」との声があり、この事業を契機に民間レベルでの文化交流も深まっています。瀬戸内海でつながる香川・岡山に暮らす人々の一体感が高まるとともに、さらなる交流・連携に向けて、一層の努力を重ねていく決意を新たにいたしました。

本書は、この 3 年間の文化交流事業の足跡を振り返ったものです。この発刊により、香川県と岡山県の文化に対する相互理解が一段と深まるよう願ってやみません。

## ごあいさつ

岡山・香川両県は瀬戸大橋で結ばれ、産業や生活など多くの分野で交流が進んでいます。岡山・香川の両県立博物館では、文化面での結び付きを深めようと、平成18年度から3年計画で協働の企画展示を行ってきました。

平成18年度から2か年は、主に両館の代表的な収蔵品の交換展示を行い、最終年である今年度は、備前焼や讃岐漆芸など両県に伝えられてきた伝統工芸に焦点をあてた巡回交流展を行いました。

この事業は今年度でひとまず終了しますが、事業実施については、準備期間を含め、両館とも相当のエネルギーを要しました。両県の財政状況、両館の人員配置や展示室の状況、また、お互いの館の固有の事情など、克服すべき課題は山積していました。このため、多くの時間や労力を費やしましたが、両県の県民から博物館の活動が高く評価され、学芸員やボランティアの交流が深まるなど、大きな成果も生まれました。

この報告書は、3年間の交流展の活動成果をまとめたものです。事業の概要やボランティアの活動、学校教育との連携などの関連事業について紹介するとともに、成果や課題についても記載しています。

今回の取組みが、今後の博物館運営のあり方を示す方向性の一つであると確信しています。今後、この報告書が一人でも多くの方々に利用されることにより、両館の3年間の取組みに対する理解が深まることを期待しています。

最後に、この交流展の実施にあたり、御協力いただきました文化庁をはじめ、関係諸機関、関係各位、ともに汗を流していただいた香川県立ミュージアムの皆様に厚くお礼申し上げます。

岡山県立博物館長 芦田和正

## ごあいさつ

瀬戸大橋開通 20 周年を迎える平成 20 年度に向けて、香川県立ミュージアム（平成 19 年度までは香川県歴史博物館）と岡山県立博物館では、文化交流事業を開催してまいりました。

平成 18・19 年度には、岡山からはそれぞれ備前焼、備前刀を、香川からは高松松平家の名宝を紹介、最終年度となる平成 20 年度にはその集大成として両館の学芸員が合同で企画した幕末から現代までの工芸のあゆみを紹介する展覧会を開催しました。香川県の漆芸、岡山県の備前焼、備前刀をはじめとする両県における工芸は、それぞれの地域文化の象徴であり、また地域の人々の大きな誇りとなっています。これら両県工芸を代表する優品の数々を展示し、幕末・明治の美術史を飾る作品から、現在活躍中の作家による作品まで、近代工芸のあゆみを総覧した本展覧会では、御来館の皆様、香川・岡山の各工芸が求め続けてきている「技と美」の極致を御鑑賞いただけたものと考えております。

また、本事業では、博物館職員の交流だけでなく、両館ボランティアの交流も深めてまいりました。展覧会開催中のガイドのため、展示内容の勉強会、また理解を深めるための現地見学会を実施、ここでは展示内容にとどまらない幅広い交流が生まれました。

さらに、平成 20 年度には、未来の交流、文化の発展を見据え、子どもたちに自県の工芸体験をしてもらうとともに、両県の工芸を紹介した鑑賞ガイドを配布いたしました。

本事業を機に、さらに多くの方々が交流を深めることができるよう期待しております。

最後になりましたが、本事業に御理解、御協力くださいました関係各位に深甚な謝意を表します。

香川県立ミュージアム館長 和 泉 幸 男



# 目 次

## 巻頭図版

ごあいさつ	2
目次・凡例	6
<b>第1章 両館の施設概要</b>	
1 岡山県立博物館	7
2 香川県立ミュージアム	7
<b>第2章 事業の概要</b>	
<b>第1節 事業の経緯・経過</b>	
1 はじめに	8
2 交流展の経緯	8
3 事業計画の策定	8
<b>第2節 平成18年度 交流展</b>	
1 組織・経過	8
2 展覧会	9
3 ボランティア	14
<b>第3節 平成19年度 交流展</b>	
1 組織・経過	16
2 展覧会	16
3 ボランティア	20
<b>第4節 平成20年度 岡山・香川合同企画文化交流展</b>	
1 事業の概要	23
2 展覧会	24
3 ボランティア	27
4 学校教育連携	31
<b>第3章 成果と課題</b>	
1 成果	36
2 課題	36
3 おわりに	36
岡山県立博物館・香川県立ミュージアム職員名簿（平成18～20年度）	37
奥付	38

## 凡 例

- 1 本書は、平成18～20年度の3か年にわたって実施した岡山県と香川県による文化交流事業の活動報告書である。
- 2 本書の執筆・編集は、両館職員が分担・協力して行った。
- 3 香川県立ミュージアムは平成20年4月1日にリニューアルオープンした。従って、本書記載の資料について、平成18、19年度は「香川県歴史博物館」所蔵で表記すべきであるが、本書では「香川県立ミュージアム」所蔵と表記を統一した。

## 1 岡山県立博物館

岡山県立博物館は、岡山県の歴史と文化を物語る原始・古代から近代に至るまでの数多くの資料を収集・保存、公開するための歴史博物館として、昭和46年に開館しました。展示は、考古・美術・文書・民俗・刀剣・備前焼など各分野の実物資料を中心に構成し、1～2か月ごとに様々なテーマを設けて行う平常展に加え、テーマを深く掘り下げて総合的な内容で行う特別展示（年2回）、企画展示（年2回）を行っています。

近年は展示のほかに、展示解説・博物館講座・吉備の国歴史探検ツアー・館内授業・出前授業・展覧会関連事業など教育普及活動にも積極的に取り組んでおり、岡山県の歴史、文化の情報発信拠点としての役割を担っています。また、それらを実施するための基礎となる調査研究活動、資料の収集・保管に取り組んでいます。

〒703-8257 岡山市後楽園1番5号

TEL 086-272-1149（代表）

FAX 086-272-1150

<http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kenhaku/hakubu.htm>



## 2 香川県立ミュージアム

香川県立ミュージアムは、香川県歴史博物館（平成11年開館）に、香川県文化会館（昭和41年開館）の美術部門を統合し、平成20年4月1日にリニューアルオープンしました。歴史博物館と美術館の機能を合わせ持つ総合的なミュージアムとして、展示・普及・調査研究・保管などの活動を行い、香川の文化拠点としての役割を担っています。

展示では、香川県の原始から近現代までの歴史を通観する歴史展示室、1～2か月ごとに様々なテーマの展示を行う企画展示、歴史や美術に関わる魅力ある特別展示を開催。普及活動では、講演会・講座のほか、工作教室、食文化体験講座等、利用者のニーズに合わせた事業を実施しています。また、それらを実施するための基礎となる調査研究活動、資料の収集・保管に取り組んでいます。

〒760-0030 高松市玉藻町5番5号

TEL 087-822-0002（代表）

FAX 087-822-0043

<http://www.pref.kagawa.jp/kmuseum/>



## 第2章 事業の概要

### 第1節 事業の経緯・経過

#### 1 はじめに

岡山県と香川県とを結ぶ瀬戸大橋は、生活・文化・産業などあらゆる分野での交流を深める役割を果たしてきた。近年では、瀬戸内海のもつ魅力を見直そうという機運が高まっており、それに伴って、両県の経済界・文化界など各界の活動も活発化している。このような中、岡山・香川両県立の博物館では、平成18年度から3か年の計画で両県の文化交流事業を始めることとなった。

#### 2 交流展の経緯

事業の発端は、平成16年7月30日、香川県直島町のベネッセハウスで開催された香川・岡山両県知事会議である。この会議で10数項目について両県知事の間で合意がなされた。「観光振興や世界への情報発信」、「瀬戸内海の水産資源を活用した連携」、「本州四国連絡道路に関する今後の取組」等の他に「歴史・文化資源を活用した連携」の項目があり、その小項目に「両県の美術館・博物館の連携」、具体的には、「美術館・博物館の収蔵品の貸し借りや交流展の実施」という事項が含まれていた。

#### 3 事業計画の策定

その後、10月に入って、香川県歴史博物館で両館の第一回協議が始まった。知事の合意事項については、両県の担当課の受け止め方に温度差があり、まず、両館の共通理解のためのすり合わせから始まった。協議内容は、経過報告、相互の博物館の状況、両県の合同企画展の可能性、開催時期、共通のテーマ設定などを中心に話し合った。

平成17年度に入ると、次年度予算要求も視野に入れ、事業実施の方向で精力的に両館の連絡会議を行った。6月に1回、7月に2回、両県で相互に開催され、合意に向けて実質的な協議が進んだ。

主な合意事項は、文化交流事業は平成18年度から3年計画で実施。1・2年目は、館蔵品の相互貸借、岡山県から初年度は備前焼を、2年目は備前刀の名品を香川県に出品し、香川県からは高松松平家ゆかりの優品を2年間にわたり岡山県に出品する。その間、両館学芸員の交流と共同研究を進め、3年目はその研究成果として「備讃の文化交流展（仮）（「備讃における工芸のあゆみ」というタイトルで実施）」を両館で企画し、巡回展を実施するという方向であった。両県知事の合意事項から約1年を経過して、試行錯誤を繰り返しながら、ようやく事業のアウトラインが固まった。

### 第2節 平成18年度 交流展

#### 1 組織・経過

岡山県では、新規・重点事業は平成14年度に策定した県の中期行動計画「新世紀おかやま夢づくりプラン」に基づく事業でなければ予算措置されないため、「ミュージアムブリッジ in おかやま・かがわー高松松平家の名宝ー」という印象に残るようなネーミングの工夫等を行った。その結果、両県知事の合意事項であることもあり、教育委員会内部では優先的に新規事業候補としてエントリーされ、知事のヒアリングを経て、無事予算が編成された。

香川県でも、「香川・岡山文化交流事業Ⅰ 備前焼～炎が生み出す窯変の美～」という事業名が付き、



無事予算が編成された。さらに、特定財源として、「OHK 岡山放送」が四国支社開局 30 周年記念の協賛事業として主催者に名を連ね、財源の面からバックアップし、合わせてテレビのスポット広告などを受け持つこととなった。

また、今回の展覧会では、お互いの館蔵品の交換だけでなく、広く両県民の交流を進める目的で、展示ガイドを行うボランティアの募集を計画した。その結果、両館でそれぞれ予想を上回る 20 名程度の応募があった。展示ガイドは専門的な知識が必要とされるため、研修会を計画し、現地見学会や勉強会など合わせて計 8 回実施した。この間に幅広い知識を習得することができたのはもちろんのこと、両県のボランティア同士の交流も進んだ。会期中は各会場で 3 日間、ボランティアによる展示ガイドを実施した。

## 2 展覧会

### (i) ポスターの作成

ポスターは「備前焼」展を行う香川県側が先行して作成した。岡山県立博物館の代表的収蔵品の備前焼緋襷大皿を用い、全体を「炎」のイメージでまとめた。交流事業のロゴマークを一部に加え、両館のポスターを並べるとシンボルの瀬戸大橋がつながるという構成を試みた。これを受け「高松松平家の名宝」展を行う岡山県側は、松平家の葵紋を中心に据えて、統一感を持たせた。



瀬戸大橋でつながれる両県のポスター

### (ii) 展示：岡山会場

#### < 展示概要 >

岡山会場では「高松松平家の名宝」展を開催した。高松松平家は、徳川御三家のひとつ水戸徳川家の筆頭分家であり、徳川家康の孫である松平頼重を初代として、幕末まで 11 代 228 年間にわたって高松藩を治めた。

本展覧会では、香川県歴史博物館が所蔵する同家伝来の大名道具の中から、将軍家や水戸徳川家、朝廷との交流を伝える品々を含む書画や茶道具、武具の優品を紹介し、近世の讃岐に影響を与えた大名文化の一端を紹介した。

< 展示構成 >

展示は、大名道具のうち「表道具」である書画、茶道具、武具の3部構成とした。

プロローグとして、系図や地図、写真パネルなどで高松松平家成立の歴史や高松藩、高松城などを徳川家康や御三家との関わりも含めながら紹介した。

〔第一部 書画〕香川県指定有形文化財である「高松城下図屏風」で高松松平家が治めた江戸時代の高松の様子を紹介した。続いて松平家伝来の書画のうち、徳川家康、秀忠、家光の親子三代の和歌色紙、水戸家や松平家当主の作品、香川県指定有形文化財の「衆鱗図」「衆芳画譜」など、江戸時代の絵画の優品を展示した。

〔第二部 茶道具〕茶の湯は大名がたしなむべきものとされ、茶会は政治と文化が重なる重要な場であった。ここでは、将軍や天皇家とのつながりを示す茶掛のほか、将軍家・水戸家をへて伝来した茶壺、御庭焼の茶道具などを紹介した。「色絵金葵唐草文水指」は高松藩の御庭焼である理兵衛焼である。千利休が作らせた楽茶碗「長次郎七種」の一つである「赤楽茶碗 銘木守」は高松松平家と深い関わりをもつ武者小路千家から献上されたものである。

〔第三部 武具〕武器や武具は、武士である大名の象徴として表道具の中でも重視され、家格に応じて備えておくべき道具とされた。ここでは、松平家に伝来する武具の中でも「御三刀」として特に重視された三振の刀剣（「太刀 銘 真守造」「刀 無銘 国俊」「脇差 無銘 貞宗」）をはじめ、刀剣・刀装具などの優品を展示した。

岡山県立博物館  
OKAYAMA  
ミュージアムブリッジ in おかやま・かがわ

平成18年度 夢づくりプラン ミュージアムブリッジ in おかやま・かがわ  
瀬戸大橋で結ばれる岡山・香川両県は、様々な分野で連携推進することが求められています。このたび、岡山・香川の県立博物館が連携し、3年間にわたり開催の展覧会を実施することにより、文化圏における交流を推進します。

平成19年2月8日(木)～3月11日(日)  
会場：岡山県立博物館 第2展示室  
主催：岡山県教育委員会 岡山県立博物館  
香川県教育委員会 香川県歴史博物館

### 高松松平家の名宝

高松松平家は、徳川御三家のひとつ水戸徳川家の筆頭分家であり、徳川家康の孫である松平頼重を初代として、幕末まで11代228年間にわたって高松藩を治めました。  
この展覧会では、香川県歴史博物館が所蔵する同家伝来の大名道具の中から、将軍家や水戸徳川家、朝廷との交流を伝える品々を含む書画や茶道具、武具の優品を紹介し、近世の讃岐に影響を与えた大名文化の一端を紹介いたします。

#### 高松松平家の格式

高松松平家の初代頼重は、水戸徳川家初代頼房の長男として誕生しますが、故あってその出生は隠され、家督は弟の光圀が継ぎます。分家を立てることとなった頼重は、常陸国下館に次いで寛永19年(1642)に東讃岐12万石を拝領し、ここに高松松平家が成立します。その後、頼重と光圀は互いの実子をそれぞれの養子としたほか、折々に養子を迎えるなど、江戸時代を通じて両家は深い関係を保ちました。

将軍の孫でもある頼重は、御三家の親族の中でもひととき高い格式を与えられました。江戸城内では、政治についての意見も求められる御三家の間に詰めるなど、彦根井伊家や会津松平家となら存在しました。また、御三家連枝(分家)の中でも高い石高(12万石)と官位(従四位上)を授けられたほか、将軍の名代として京都や日光への使者を務めるという重要な役割も果たしました。高松松平家の特徴づけられるこれらの待遇は、頼重の後も継承されて幕末まで続きました。

※従重、私伊藤頼重に男子が継承して、このころへ高松藩とすべしと云ふ者ありとす。頼重はわが子といふ也。

※凡の中の数値は代数を示す  
○丸は高松松平家、□丸は水戸徳川家

#### 大名道具の形成

大名家には、格式によって様々な道具が備えられました。高松松平家では、水戸徳川家の光圀から頼重に譲られたとされる書物や刀剣などを中心に、将軍家や朝廷から拝領した品々、藩主が集めた書画や陶磁器などのほか、日常に使う調度などが加わり、江戸時代には膨大な数の大名道具があったと考えられます。

これらの道具は、個々の価値だけではなく、使われる場に応じた格式や調和の中に位置付けられ、主に公的な場で用いられる表道具と、藩主の家紋が用いられる私的な奥道具とに大別できます。大名の価値観によって集められた道具の数々は、その生活や文化、美意識を今に伝える貴重な史料といえるでしょう。

展示解説シート



展覧会開会式



会場の様子

< 関連事業 >

会場では、香川県歴史博物館のパネル紹介を行い、カラー4ページの展示解説シートと展示品目録を作成し、来館者に配布した。

会期初日の2月8日には来賓として山口裕視岡山県副知事に御列席いただき開会式を行い、その後、香川県歴史博物館学芸員がミュージアムトークを行った。

会期中の関連事業として岡山・香川両館学芸員の展示解説のほか、ボランティアガイドを3日間行った。ボランティアガイドは、来館者に好評で、アンケートにはボランティアへの好評価が寄せられた。

広報では、通常のポスター、チラシ配布等に加えて大看板を岡山市表町商店街の2か所に設置した。岡山市中心部を通る電車通りからもよく見え、大きな集客効果があった。

この展覧会は、両県教育委員会と両館が主催し、会期は平成19年2月8日～3月11日の実質28日間、会場は岡山県立博物館第2展示室とした。

隣県でありながらよく知られてなかった高松松平家の名宝の展覧は、大変多くの関心をよび来館者は7,960名にのぼり、大好評の展覧会となった。

主な展示資料

資料名・年代	所蔵
高松城下図屏風 〔香川県指定有形文化財〕 江戸時代	香川県立ミュージアム
人麿・小町・喜撰図 〔高松市指定有形文化財〕 江戸時代	香川県立ミュージアム
色絵金葵唐草文水指 江戸時代	高松松平家歴史資料 (香川県立ミュージアム保管)
太刀 銘 真守造 〔重要文化財〕 平安時代	高松松平家歴史資料 (香川県立ミュージアム保管)
白糸威大鎧 江戸時代	香川県立ミュージアム



香川県歴史博物館学芸員によるミュージアムトーク

関連事業

事業名	実施日
香川県歴史博物館学芸員によるミュージアムトーク	平成19年 2月8日(木)
	2月18日(日)
学芸員による展示解説	平成19年 2月10日(土)
	2月24日(土)
	3月10日(土)
ボランティアガイド	平成19年 2月11日(日)
	2月25日(日)
	3月4日(日)

(iii) 展示：香川会場

< 展示概要 >

香川県歴史博物館では「備前焼～炎が生みだす窯変の美～」展を開催した。備前焼はその名のとおり岡山県の焼物であるが、同時に日本を代表する焼物でもある。約900年前の平安時代末に、須恵器を焼いていた陶工たちが岡山県東部の伊部に移り、周辺の土を用い赤松を燃料として作ることに始まり、日用雑器、茶道具、色備前制作など幾多の歴史を経て、現在も重要無形文化財保持者(人間国宝)を含む多くの陶芸作家たちを擁し盛んに制作されている。茶褐色の色合いを基本とし、釉薬を使わず高温で焼くことにより発生する「窯変」と呼ばれるさまざまな変化が特徴である。

この展覧会は岡山県立博物館が所蔵する備前焼の優品によりその歴史と魅力を紹介するとともに、現代の重要無形文化財保持者の作品を展示し、備前焼900年の歴史を通観する企画とした。



< 展示構成 >

展示は4部構成とし、約100点の資料を展示し、歴史に沿った流れとした。

〔第1部 備前焼の歴史〕 備前焼の源流である平安時代の須恵器、最古段階の鎌倉時代の備前焼、香川県小豆島沖の水ノ子岩海底の沈没船から引き揚げられた南北朝時代の備前焼や船の碇石などの展示とともに、「一遍上人絵伝 備前福岡市」（複製）により当時実際に備前焼大甕が売られていた状況がわかるようにした。

〔第2部 日用に使われた備前焼〕 備前焼の需要が飛躍的に増大し、その流通が西日本を中心に全国を席卷した室町時代の主要生産品である壺・すり鉢・大甕の優品を中心に据え、更に重要文化財・岡山県指定重要文化財の壺・花瓶、伊予南大窯跡周辺窯跡群からの発掘資料などを展示し、備前焼の「勢い」を示した。

〔第3部 茶道具の優品〕 釉薬を用いない素朴な風合いに当時の茶人が求めていた美が見出され、茶道具としての新しい価値を獲得した桃山時代に焦点を当て、様々な窯変が生きる茶陶を展示し、備前焼の「美」を味わってもらうこととした。また見所をわかりやすく説明する窯変の解説パネルを展示した。備前焼は江戸時代に衰退していくため、工人は細工物・色備前などに活躍を求めるが、この時代の作品も合わせて紹介した。

〔第4部 人間国宝のわざと美〕 昭和の桃山文化復興の流れの中で、備前焼も桃山時代の茶陶を手本にすることで、見事に復活を遂げた。その隆盛の中心にあった5名の重要無形文化財保持者（人間国宝）の作品を通して、現代に息づく備前焼の魅力を紹介した。



展示解説シート



歴史講演会（上西節雄氏）



会場の様子

< 関連事業 >

会場出口では、岡山県立博物館のパネル紹介を行った。またカラー4ページの展示解説シートと展示品目録を作成し、来館者に配布した。このほか、会場外のロビーで備前焼の窯焚きを取めたビデオを放映し、窯変がどのように生まれるかの理解が深まるようにした。

会期初日の2月10日には来賓として真鍋武紀香川県知事、重要無形文化財保持者伊勢崎淳氏に御列席いただき開展式を行った。式の後には特別解説として伊勢崎淳氏に展示を御案内いただいたこともあり、初日は400名近い来館者で大いににぎわった。

会期中は展覧会に合わせてさまざまな関連行事を実施した。伊勢崎淳氏の特別解説は会期中にもう一度お願いし、現代陶芸作家が語る備前焼の美を来館者に楽しんでいただいた。予想を上回る来館者に関心の高さをうかがうことができた。香川県歴史博物館では教育普及事業の一つとして歴史講演会を年数回実施しているが、会期中はこの展覧会に合わせて、上西節雄倉敷市立美術館長に「茶道具にみる備前焼」と題して御講演いただき、141名の聴講があった。また講演後、会場に移って、特別に展示解説をお願いし、閉館時間まで聴講者の質問に答えていただいた。ミュージアムトークは、岡山・香川両館の担当学芸員が分担して展示品の解説を行った。ボランティアガイドは、岡山県立博物館ボランティアを中心に香川県歴史博物館ボランティアと協力して行った。

会期は平成19年2月10日～3月18日の実質32日間で、香川県歴史博物館の企画展示室を会場とした。来館者数は4,874名にのぼり、展覧会は好評のうちに閉幕した。この展覧会のため香川・岡山両館による備前焼展実行委員会を立ち上げ、これに両県教育委員会・両館が主催となった。またOHK岡山放送が主催に加わることで、広報に大きな幅が生まれ、年末以降テレビで15秒CMを流したり、OHK岡山放送のホームページやメールマガジンで情報発信を行うことができた。

主な展示資料

資料名・年代	所蔵
四耳大壺〔重要文化財〕 室町時代	赤磐市千光寺
大筒花生〔重要文化財〕 弘治3(1557)年	個人
緋襷大皿 桃山時代	岡山県立博物館
緋襷大徳利 桃山時代	岡山県立博物館
角花生 伊勢崎淳 作 平成18(2006)年	個人



岡山県立博物館学芸員によるミュージアムトーク

関連事業

事業名	実施日
歴史講演会 「茶道具にみる備前焼」 上西節雄氏 (倉敷市立美術館長)	平成19年2月8日(日)
特別解説 伊勢崎淳氏 (備前焼 重要無形文化財保持者)	平成19年2月10日(土) 3月4日(日)
ミュージアムトーク	平成19年2月11日(日) 2月25日(日) 3月11日(日) 3月18日(日)
ボランティアガイド	平成19年2月24日(土) 3月3日(土) 3月10日(土)

### 3 ボランティア

#### (i) ボランティア交流会

##### < 新たな取組みのスタート >

岡山・香川文化交流事業（以下、交流事業）では、3か年にわたる共同展示の開催とともに、展覧会の実施過程とその後に続く「人の交流」も重要な柱の一つとして位置づけてきた。職員だけではなく、最終的には来館者を通して両県の交流が広がることを目標とし、その第一歩として、まずは職員と一緒に事業を支えるボランティアのつながりを作ろうということで立ち上げたのがボランティア交流会である。

活動は、先行していた展示計画を基本において、展覧会場で来館者に解説をするガイドの実施と、その研修としての勉強会・現地見学会からなる交流会の開催を博物館側が計画し、館からの呼びかけにボランティアが応じるかたちで始まった。約50名のボランティアが歴史展示室の解説や普及事業のサポートを行っていた香川県歴史博物館と、博物館友の会の会員を対象としてボランティア参加者を募る岡山県立博物館、二つの状況の異なる博物館ボランティアが集まったの新たな取組みとなった。

##### < 交流会 >

交流会は、7月中旬から翌年2月までの間に2つのテーマの研修を盛り込むあわただしい日程で行ったが、毎回20～40名程が参加する活気のある会となった。各県2回の勉強会では、展覧会の担当学芸員が展覧会のコンセプトや展示品について講義形式で紹介。参加したボランティアからは、近いとはいえよく知らなかった互いの県の歴史・文化に新鮮さを感じると同時に、自らの県について改めて学び、再発見することも多かったという声が聞かれた。勉強会の後は、それぞれの博物館見学や日常の活動紹介などを行ったが、移動も含む限られた時間の中ではガイドのための学習が優先されがちで、ボランティアが互いに知りあう場を十分に作れなかったことが反省としてあげられる。

現地見学会では、ガイドの内容を充実させるため、岡山・香川双方の展示テーマにゆかりがある場所を訪れた。見学コースはボランティアと職員が協力して計画し、バス内や現地での案内、資料作りなどはボランティアが積極的に参画した。準備の段階では、わかりやすい案内のあり方について相談し、悩む場面もあったが、ゆかりの地を実際に歩く体験は展示への理解を深めるための大きな蓄積となった。何よりもボランティア自身の意識の中にあつた両県の距離を近づけ、バス内や昼



「高松松平家の名宝」勉強会

#### ボランティア交流会概要

日 時	内 容	場 所	岡山参加者	香川参加者
7月24日(月) 13:30～15:30	備前焼勉強会①「備前焼 美の歴史」 概要説明、ボランティア活動について、岡山県立博物館の見学	岡山県立博物館	12	28
8月23日(水) 13:30～15:30	高松松平家の名宝勉強会①「高松松平家と伝来の名宝について」 概要説明、ボランティア活動紹介、香川県歴史博物館の見学	香川県歴史博物館	15	15
9月24日(日) 9:00～16:00	現地見学会 「高松松平家ゆかりの寺院を訪ねる旅～屋島寺・法然寺～」	香川県高松市	17	13
10月29日(日) 9:00～16:00	現地見学会 「備前焼の里をめぐる旅～備前市伊部・閑谷学校～」	備前市伊部周辺	21	21
11月16日(木) 13:30～15:30	備前焼勉強会②「備前焼 美の鑑賞」 岡山県立博物館にて開催中の展示見学	岡山県立博物館	13	12
12月15日(金) 13:30～15:30	高松松平家の名宝勉強会②「高松松平家の名宝」 香川県歴史博物館にて開催中の展示見学	香川県歴史博物館	13	12
12月18日(月) 13:30～15:30	備前焼ガイド練習会	岡山県立博物館	14	6
1月10日(水) 13:30～15:30	松平家の名宝ガイド練習会	香川県歴史博物館	3	12



食時の会話がメンバー同士の親交を深める機会となったことは大きな成果であった。練習会（展示概要の確認など）と展覧会開会後の直前学習を加えると、実質的な交流会は10回に及んだ。また、この間も、ボランティアは個々に得意分野の情報をやりとりするなど、ガイドに備えて準備を行った。



現地見学会（高松市屋島にて）

## (ii) ボランティアガイド

展示ガイドは、交流会参加者の中から希望者を募り、岡山・香川の両会場で3回ずつ実施した。担当する展示は特に限定しなかったが、結果的に「高松松平家の名宝」展（岡山会場）では香川側のボランティア、「備前焼」展（香川会場）では岡山側のボランティアが中心となり、不得意な部分はフォローしあいながらガイドを行った。入口に案内看板を設置し、希望者にボランティア1名がつくスタイルで実施したが、時には複数で部分的な解説を分担して行うなどの試みも行われた。

ガイド実施日の休憩時間や終了後には、両県のボランティアが集い、職員も交えながらの会話が弾んだ。話題は会場での出来事や感想、反省におよぶことが多く、「お客さんから逆にこんなことを教えてもらった」、「こんな資料を使えばもっとわかりやすく説明できたかもしれない」などと熱心に語り合う中で、来館者とのふれあいを感じた刺激や手応えが、もっとわかりやすく伝えたいという気持ちに自然とつながり、それをボランティア同士が共有しあう大切な時間となっていたのではないかと思う。

平成18年度は、「交流」の先に何ができるかという展望まで意識が広げられないままガイドの実施に終始した面もあり、反省すべき点は多い。しかし、ボランティアが、交流会を経て岡山・香川両県相互への意識を変えたこの半年の自らの経験を重ねながら、会場で来館者と共感しあっていきいきと対話する姿は印象的で、職員の解説とは違う魅力を展覧会に添えていたのは確かである。課題はあるものの、それぞれに手応えと反省、仲間を得て、次年度に向かう気持ちをもって終了した一年であった。



「備前焼」ボランティアガイド

## ガイド日程と参加人数

日 時	内 容	場 所	岡山参加者	香川参加者
2月8日(木) 9:30～12:00	「高松松平家の名宝」開会式 直前学習と打ち合わせ	岡山県立博物館	16	9
2月10日(土) 9:30～12:00	「備前焼」開展式 直前学習と打ち合わせ	香川県歴史博物館	11	14
2月11日(日) 13:00～15:30	「高松松平家の名宝」ボランティアガイド	岡山県立博物館	5	3
2月24日(土) 13:00～15:30	「備前焼」ボランティアガイド	香川県歴史博物館	6	4
2月25日(日) 13:00～15:30	「高松松平家の名宝」ボランティアガイド	岡山県立博物館	7	5
3月3日(土) 13:00～15:30	「備前焼」ボランティアガイド	香川県歴史博物館	5	6
3月4日(日) 13:00～15:30	「高松松平家の名宝」ボランティアガイド	岡山県立博物館	5	5
3月10日(土) 13:00～15:30	「備前焼」ボランティアガイド	香川県歴史博物館	7	6

### 第3節

## 平成 19 年度 交流展

### 1 組織・経過

本年度は両県ともに単県予算で実施した。岡山県は「高松松平家の名宝Ⅱ－大名から華族へ」、香川県は「備前刀の世界－鉄（くろがね）の美－」というタイトルで、前年と同様、館藏品を中心とした交換展を実施した。ボランティア事業に関しては前年度の実績を踏まえ、より充実した内容で交流会等を進めることができた。

### 2 展覧会

#### (i) ポスターの作成

ポスターの作成は「備前刀の世界」展を行う香川県側では、備前刀の特徴の一つである、明るく冴えた刃文を備前刀の優品「祐定」をクローズアップすることで表現した。「高松松平家の名宝Ⅱ」展を行う岡山県側では、国宝「藤原佐理筆詩懐紙」を中心に構成し、その華やかな世界を表現した。この年も両館のポスターを並べると瀬戸大橋がつながるデザインとし、さらに相手館の展覧会の広報も行うという工夫を行った。刀の鏝と葵紋は両県の交流が無限大に広がることを期待したデザインである。

本年は、瀬戸大橋開通 20 周年にあたり「瀬戸大橋開通 20 周年記念事業」の一環として本展覧会を位置付け、ポスター・チラシにも瀬戸大橋開通 20 周年記念事業実行委員会作成のロゴを配した。



瀬戸大橋でつながれる両県のポスター

## (ii) 展示：岡山会場

### < 展示概要 >

岡山県立博物館では「高松松平家の名宝Ⅱ－大名から華族へ－」展を開催した。本展覧会では、香川県歴史博物館が収蔵する高松松平家歴史資料のうち、前年度に引き続き大名時代から伝来する名品を、また近代に使用あるいは収集された品々を展示し、大名華族高松松平家に脈々と続く伝統と美の世界を紹介した。展示は2部構成とし、32件の資料を展示した。

### < 展示構成 >

〔プロローグ 高松松平家の成立〕系図や地図、写真パネルなどで高松松平家成立の歴史や高松藩、高松城などについて徳川家康や御三家との関わりなども含めながら紹介した。「備前焼 甲冑香炉」は、岡山藩3代藩主池田光政の好みでつくられ、7代治政から高松松平家へ贈られた品で、今回里帰り展示となった。江戸時代の岡山・香川の交流の一端が知られ、本交流事業の象徴的な資料といえるものであった。

〔第一部 大名の風雅〕高松松平家には、書の優品が数多く伝来している。ここでは、国宝「藤原佐理筆詩懐紙」をはじめとする名筆を紹介した。さらに、大名が自ら筆をとった書の作品などから、それらを制作・鑑賞した彼らの高い教養を紹介するとともに、その伝来などから松平家の血縁や政治的な位置付けについても紹介した。

〔第二部 伯爵 松平家〕明治維新後、華族制度が整えられて松平家は伯爵となる。貴族院議長を務めたほか、政治・教育面で活躍した12代頼寿の大礼服や自筆書、収集した近代絵画や小品盆栽などをおして、旧大名家の歩みを紹介した。また、大名家の女性たちの暮らしぶりをうかがわせる雛道具を展示し、会場に彩りを添えた。

### < 関連事業 >

会場の最初に両館の紹介や初年度の交流事業をパネルで紹介した。カラー4ページの展示解説シートと展示品目録を作成し、来館者に配付した。

会期初日の1月5日には来賓として山口裕視岡山県副知事に御列席いただき開会式を行った。式の後、

香川県歴史博物館学芸員によるミュージアムトークを行った。

会期中は関連行事として記念講演会、岡山・香川両館学芸員の展示解説とボランティアガイドを行った。記念講演会は、四辻秀紀徳川美術館企画情報部長に「高松松平家の名宝－上巳の節供 ひなまつり－」と題して御講演いただいた。展示資料の雛道具についても丁寧に解説いただき、80名の聴講者が聴き入った。学芸員の展示解説は、岡山・香川両館の担当学



展示解説シート



香川県歴史博物館学芸員によるミュージアムトーク

芸員が分担して行った。ボランティアガイドは、初年度に続き、来館者に好評を得た。

この展覧会は両博物館と両県教育委員会が主催し、会期は2008年1月5日～2月3日の実質26日間、会場は昨年度同様岡山県立博物館第2展示室とした。

来館者数は5,334名で前年度には及ばなかったが、初年度のリピーターが多く、高松松平家の名宝への期待の大きさが感じられた。雛道具や彩りの美しい屏風や画帖が新春の展覧会を華やかな雰囲気包んだ。



記念講演会（四辻秀紀氏）

## (ii) 展示：香川会場

### < 展示概要 >

香川県歴史博物館では「備前刀の世界一鉄（くろがね）の美」展を開催した。この年は香川と岡山を結ぶ瀬戸大橋が4月に20周年を迎えるため、「瀬戸大橋20周年記念事業」協賛イベントにも位置づけた。

備前刀は初年度の備前焼同様「備前」を冠する岡山県の代表的な歴史資料である。日本には平安時代以来代表的な日本刀の産地5か所があり、これを総称して「五ヶ伝」と呼んでいる。平安～室町時代の刀工の約1/4が備前刀工であり、国宝・重要文化財の日本刀の約半数が備前刀であることからわかるように、「五ヶ伝」の代表が備前であり、備前刀はまさに日本一の刀剣と位置づけられている。

この展覧会は備前刀の有数のコレクションを誇る岡山県立博物館からその精髓を展示し、あわせて日本刀をめぐる匠の技を紹介し、鉄の芸術と呼ばれる日本刀の魅力を伝える企画とした。

### < 展示構成 >

展示は4部構成とし、30件の資料を展示した。

会場内入口正面にポスターに使用した「刀 源兵衛尉祐定」を置き備前刀のイメージを持っていただき、続いて「序 日本刀と備前刀」で日本刀や備前刀についてのパネルを展示し、「なぜ備前刀なのか」の予備知識を持った上で、展示を見ることができるよう工夫した。

〔第1部 華麗なる備前刀の世界〕展覧会のメイン展示である。重要文化財2口を含む11口の備前刀を時代順に並べ、まずは備前刀の美しさを十分に堪能してもらうことにした。また時代を追うことで、太刀

## 主な展示資料

資料名・年代	所蔵
藤原佐理筆詩懐紙〔国宝〕 安和2（969）年	香川県立ミュージアム
源氏物語画帖「朝顔」 江戸時代	高松松平家歴史資料 (香川県立ミュージアム保管)
十二首和歌絵屏風 江戸時代	高松松平家歴史資料 (香川県立ミュージアム保管)
小品盆栽道具 明治～昭和時代	高松松平家歴史資料 (香川県立ミュージアム保管)
雛道具 江戸～昭和時代	高松松平家歴史資料 (香川県立ミュージアム保管)

## 関連事業

事業名	実施日
記念講演会 「高松松平家の名宝 -上巳の節句 ひなまつり-」四辻秀紀氏（徳川 美術館 企画情報部長）	平成20年1月13日（日）
香川県歴史博物館学芸員による ミュージアムトーク	平成20年1月5日（土） 1月20日（日）
学芸員による展示解説	平成20年1月12日（土） 1月20日（日）
ボランティアガイド	平成20年1月6日（日） 1月14日（月・祝） 2月3日（日）



と刀の違い、時代の世相を反映して姿形が変化することなどを理解してもらい、絵画資料やパネルにより刀剣が歴史の中で実際にどのように使われていたかを補足した。

[第2部 日本刀を生み出す匠の技] 第1部で味わった備前刀の美しさが生み出される理由が、わずかの失敗も許さぬ刀工の高度な技にあることを、日本刀製作工程資料から理解してもらう。また岡山県の現代刀工や研師・刀身彫刻師の作品・工具を展示し、その技が現代にも受け継がれていることを示した。

[第3部 神仏に捧げられた備前刀] 神社への奉納刀を展示し、戦いの道具としてだけでなく日本刀が日本人の信仰・精神と深く結びついていたことを理解してもらう。実戦にも耐えうるように作られた全長約3.7mの「大太刀 法光」はその製作の不可思議さが観覧者の多くを魅了していた。

[第4部 日本刀を彩る刀装具の美] 刀身だけでなく、拵（刀の外装）や刀装具にも各時代の工芸技術の粋が集められている。その日本を代表する細密芸術としての美を示し、総合芸術として日本刀が伝統工芸に占める位置を改めて実感してもらうこととした。

< 関連事業 >

出口では、岡山県立博物館や初年度の交流事業のパネル紹介を行った。またカラー4ページの展示解説シートを作成し、来館者に配布した。合わせて展示品目録、岡山県立博物館で備前刀の展示の際配布している「日本刀鑑賞の手引き」も配布した。この他、会場外の無料ゾーンのロビーで現代の備前刀の製作工程を取めたビデオを放映し、資料だけでは伝えにくい製作工程の理解への補足とした。このビデオは予想以上に好評で期間中休憩を兼ねてビデオを鑑賞する人が絶えなかった。

会期初日の1月12日には開展式を行った。式の後には岡山県立博物館学芸員による展示解説を実施し、会場内が賑わった。

**香川県歴史博物館**  
香川県歴史博物館では、平成18年度から3年をかけて瀬戸大橋で結ばれる香川・岡山両県の文化交流事業を実施しています。2年目となる今回は、岡山県立博物館の収蔵品を中心とする備前刀の名品を展示し、その歴史と魅力を紹介します。  
瀬戸大橋開通20周年記念 香川・岡山文化交流事業Ⅱ (20)

## 備前刀の世界 —鉄くろがねの美—

会期：平成20年1月12日(土)～2月17日(日) 主催：香川県歴史博物館、香川県、岡山県立博物館、岡山県教育委員会

「五ヶ伝」と平安～室町時代の旧国別刀工数

備前	56%
美濃	26%
大和	8%
山城	7%
相模	3%
その他	0%

岡山県内の主な鍛刀地

**日本刀と備前刀**

日本刀は「武士の魂」といわれるように、日本の歴史や文化と深い関わりをもっている。また、その美しい造形は、鉄の芸術として今なお高く評価されている。日本刀の伝統的な産地として、山城(京都府)・大和(奈良県)・備前(岡山県)・相模(神奈川県)・美濃(岐阜県)の5国がある。それぞれに特徴的な作風があり、これを総称して五ヶ伝と呼んでいる。

その代表格が備前であり、平安～室町時代における刀工の約1/4が備前刀工であることや、国宝や重要文化財に指定されている日本刀の約半数が備前刀であることが示すように、日本一の刀剣王国として確固たる地位を築いている。

備前刀製作の中心となったのが、岡山三大河川(一宮井川)の下流域一帯である。その理由として玉置や水谷など良質な原料が入手しやすい土地であったこと、交通の要所に位置していたこと、福岡県という産地間が存在したことが挙げられる。

備前刀の歴史は平安時代使用に始まり、鎌倉～南北朝時代には一文字派・長船派を中核とする多数の刀工流派が生まれ、資金調を調達し、室町時代になると、長船派が隆盛となり多くの名工を輩出した。彼らは戦国乱世の刀剣需要に応じて大量の刀剣を製作し、「長船」は備前刀の代名詞となった。安土桃山時代から江戸時代初期にかけて、政治経済体制の変化や吉井川の氾濫により備前刀工は衰退していくが、江戸時代を通じて命脈を保ち、その技を伝えた。

備前の刀工系譜

展示解説シート



展覧会開展式



歴史講演会(臼井洋輔氏)

会期中は展覧会にあわせさまざまな関連事業も実施した。岡山県指定重要無形文化財「刀剣製作技術」保持者安藤広清氏の特別解説では刀工から見た備前刀の美しさ、制作にまつわるさまざまなお話を来館者に楽しんでいただいた。香川県歴史博物館では教育普及事業の一つとして歴史講演会を年数回実施しているが、会期中はこの展覧会にあわせて、臼井洋輔吉備国際大学教授に「備前刀が何故日本一の刀剣になり得たのか、その理由」と題して御講演いただき、115名の聴講者が聞き入った。また講演後、会場に移って特別に展示解説をお願いし、閉館時間まで聴講者の質問にお答えいただいた。ミュージアムトークは香川・岡山両館の担当学芸員が分担して展示品の解説を行った。ボランティアガイドは初年度に続き、好評を得た。

会期は平成20年1月12日～2月17日の実質33日間で、香川県歴史博物館の企画展示室を会場とした。

来館者数は4,447名と1年目とほぼ同数であったが、初年度の備前焼が女性客、2年度の備前刀が男性客中心と客層に予想通りの対照的な違いが見られた。一方で来館された女性客から怖いだけのイメージを改めたという声も聞かれ、日本刀の客層が広がったことや、日本刀の集客力が高いことが実感された。

1月16日には香川県歴史博物館入場者が100万人に達し、そのセレモニーを行うという慶事も当展覧会と重なった。



岡山県立博物館学芸員によるミュージアムトーク

### 3 ボランティア

#### (i) ボランティア交流会 <2年目のスタート>

前年度の交流事業は、新年度が始まってから新規事業として立ち上げたので、ボランティア交流会も7月下旬の遅いスタートとならざるをえなかった。本年度は、展覧会会期が両館とも1～2月と早まっ

### 主な展示資料

資料名・年代	所蔵
太刀 則宗 〔重要文化財〕 鎌倉時代初期	岡山県立博物館
太刀 長光 〔重要文化財〕 鎌倉時代中期	岡山県立博物館
太刀 幸景 〔岡山県指定重要文化財〕 応永30(1423)年	岡山県立博物館
大太刀 法光 〔岡山県指定重要文化財〕 文安4(1447)年	吉備津神社
刀 安藤広清 平成18(2006)年	個人



香川県歴史博物館入場者100万人達成

### 関連事業

事業名	実施日
歴史講演会 「備前刀が何故日本一の刀剣になり得たのか、その理由」 臼井洋輔氏(吉備国際大学教授)	平成20年 1月27日(日)
特別解説 安藤広清氏(岡山県指定重要無形文化財「刀剣製作技術」保持者)	平成20年 2月3日(日)
ミュージアムトーク	平成20年 1月13日(日) 1月20日(日) 2月10日(日) 2月17日(日)
ボランティアガイド	平成20年 1月19日(土) 1月2日(土) 2月17日(土)

たこと、継続事業のため館側の準備が早目に進められたこと、そして館とボランティア双方が前年度の経験をふまえてスムーズな活動にしたいという思いが一致したことで、初回の交流会が5月下旬となった。

<前年度の反省を生かして>

「ボランティアとは何か」という根本的なことについて、両館ボランティアが考え、話し合う場を交流会の中で設けた。歴史のある香川側のボランティアの話は、経験に基づいた説得力のある内容で、岡山側のボランティアは大いに刺激を受け、自分たちの組織や活動内容の方向性を主体的に考える契機となった。ボランティア活動の自発性、無償性については、ある程度の理解を共有していたが、その公共性についても考えるようになった。ただ、自身の勉強のためという交流会参加者もあったのは事実で、そのような参加者をどのように展示ガイドへつなげていくかが課題となった。しかし、大部分の参加者が「勉強したことをいかに伝えるか」「どのような展示ガイドが来館者にとってよいのか」を考えたり、意見交換したりする場面が増えてきた。

ボランティアガイドは展覧会とともに交流事業の一翼を担っていたため、前年度はガイド養成を展覧会開会に間に合わせる事が至上課題であった。そのため、展示に関する知識を伝えることが交流会の内容となり、参加者の意識もそれが主体となってしまった。しかし、本年度は、交流事業が「モノの交流」だけでなく「人の交流」も重要な柱としているということ職員もボランティアも再確認し、交流会ではボランティア、職員ともに自己紹介の時間を設けた。前年度の交流を通じて親しくなっていた両館ボランティアではあったが、ボランティアとしての顔以外に、その人となりを知ることにより親近感が増し、交流会で顔を合わせると展示に直接は関係ない両県のことについても話題に上るようになった。また、「〇〇さんが尋ねていたから」と調べてきたことを伝えたり資料を準備したりという交流の深まりもみられた。

<交流会>

交流会は、両館の見学、学芸員の展示解説を含めた勉強会を6回、現地見学会を相互に1回ずつ、計8回行い、毎回20～40名の参加者があった。前年度実施の展示品を前にした2回のガイド練習会は、展示担当学芸員とボランティア双方の負担を考えてとりやめた。しかし、ボランティアからは、実際にガイドを行うのに講義と資料だけでは不安であるという声も聞かれ、次年度の課題として残った。

現地見学会は前年度同様、両県の展覧会ゆかりの地を訪ね



「高松松平家の名宝Ⅱ」勉強会

ボランティア交流会概要

日 時	内 容	場 所	岡山参加者	香川参加者
5月26日(土) 13:30～15:30	高松松平家の名宝Ⅱ勉強会①「松平家の歴史と伝来の名宝」ボランティア自己紹介、概要説明、ボランティアについて、香川県立ミュージアムの見学	香川県歴史博物館	11	20
6月24日(日) 13:30～15:30	備前刀についての勉強会①「備前刀の歴史」岡山県立博物館の見学	岡山県立博物館	14	19
7月8日(日) 10:00～16:00	現地見学会 「備前刀の里をめぐる旅～瀬戸内市～」	瀬戸内市長船町福岡地区・備前長船刀剣博物館	16	24
8月29日(水) 13:30～15:30	高松松平家の名宝Ⅱ勉強会②「松平家の歴史と近代収集資料」	香川県歴史博物館	12	8
9月21日(金) 13:30～15:30	備前刀勉強会②「備前刀の名品紹介」	岡山県立博物館	14	7
10月28日(日) 10:00～16:00	現地見学会 「高松再発見の旅～高松市～」	栗林公園・瀬戸内海歴史民俗資料館・白峯寺	13	17
1月5日(土) 10:00～11:30	高松松平家の名宝Ⅱ勉強会③「高松松平家の名宝Ⅱ」展の開会式、学芸員の展示解説	岡山県立博物館	13	9
1月12日(土) 10:00～11:30	備前刀勉強会③「備前刀の世界」展の開会式、学芸員の展示解説	香川県歴史博物館	12	16

る内容とした。見学地選びや現地講師の依頼の段階から前年度以上にボランティアが積極的にに関わり、移動中の説明や資料作り、昼食の手配などを職員と協力して行った。特に備前長船刀剣博物館では刀の鍛錬や刀装具製作工程の実演見学、栗林公園では当地ガイドの案内で園内を歩くという内容を取り入れたことは、単に両県の歴史・文化理解にとどまらず、展示品のより深い理解とガイドについて考えるよい機会となった。さらにメンバー同士の親交も深まり、その後の活動にも好影響を与えた。



現地見学会（備前長船刀剣博物館にて）

## (ii) ボランティアガイド

展示ガイドは、本年度も交流会参加者の中から希望者を募り、両県の会場で3回ずつ実施した。「高松松平家の名宝Ⅱ」展（岡山会場）では香川側のボランティア、「備前刀」展（香川会場）では岡山側のボランティアが中心となってガイドを行った。入口に案内看板を設置し、希望者にボランティア1名がつくスタイルは前年度と同様であったが、来館者からの質問などにはお互い助け合いながら対応していた。また、ガイド練習会がなかったため、お互いのガイドを来館者と一緒に聞き、勉強する姿もみられた。ガイド時間は午後の2時間半をあてたが、勉強してきた成果をより多くの人に届けたいとの思いからガイド時間延長希望の声が聞かれた。ガイド実施日の休憩時間や終了後には、両県のボランティアが集い、職員も交えながらの会話が弾んだ。ガイドの感想や反省が主であったが、ときにはボランティアによるミニ講義や質問タイムとなることもあり、主体的な活動がみられるようになってきた。

### ガイド日程と参加人数

日 時	内 容	場 所	岡山参加者	香川参加者
1月6日(日) 13:00～15:30	「高松松平家の名宝Ⅱ」ボランティアガイド	岡山県立博物館	8	5
1月14日(月祝) 13:00～15:30	「高松松平家の名宝Ⅱ」ボランティアガイド	岡山県立博物館	4	4
1月19日(土) 13:00～15:30	「備前刀」ボランティアガイド	香川県歴史博物館	7	5
2月2日(土) 13:00～15:30	「備前刀」ボランティアガイド	香川県歴史博物館	6	5
2月3日(日) 13:00～15:30	「高松松平家の名宝Ⅱ」ボランティアガイド	岡山県立博物館	6	5
2月9日(土) 13:00～15:30	「備前刀」ボランティアガイド	香川県歴史博物館	4	5

本年度は前年度の反省を生かした内容となった上、時間的余裕も生まれ、ボランティアの意識の確立、主体的な交流活動等に活動の発展をみることができた。前進する過程で新たな課題もみえ、よりよいボランティアガイド、より深い交流を目指そうという共通認識などが生まれ、次年度の交流への期待をふくらませ、1年を無事終了した。



「高松松平家の名宝Ⅱ」ボランティアガイド



「備前刀」ボランティアガイド

## 第4節

# 平成20年度 岡山・香川合同企画文化交流展

### 1 事業の概要

平成20年度は、瀬戸大橋が開通し、20周年を迎える年であり、これを記念しての事業である。最終年にあたる本年度の展覧会は、これまでの2年間に両県の県立博物館の館蔵品を中心とした交換展示を行いながら、両館の学芸員が協働で調査・研究を重ねてきた成果を生かした内容で行った。その内容は、両県の伝統工芸の技と美、あゆみを紹介するものであり、「備讃における工芸のあゆみ～幕末・明治から現代へ～」というタイトルで行った。展覧会の開催は、平成20年10月から12月にかけて香川県立ミュージアムが先行し、その後岡山県立博物館に会場を移す巡回交流展形式とした。

本年度は、事業の実施にあたり、両県で岡山・香川合同企画文化交流展実行委員会を立ち上げ、事務局は岡山県が担当した。主催は、岡山・香川合同企画文化交流展実行委員会、両県立博物館、岡山県教育委員会、香川県とし、共催に岡山では山陽新聞社、香川では四国新聞社、後援団体として社団法人日本工芸会中国支部・四国支部をはじめ、両県の新聞社、マスコミ各社から協力をいただいた。

展覧会に合わせ、本年度もボランティア交流事業を実施した。これまで2年間の実績や反省点を生かして、より充実した内容で交流会等を進めることができた。

さらに本年度は、将来の郷土文化の担い手である子どもたちに、郷土の歴史・文化や伝統工芸に対する理解を深め、親んでもらうことを目的として、学校教育と連携した事業も行った。両県の工芸（岡山県は備前焼、香川県は漆芸）をわかりやすく紹介した鑑賞ガイドの作成・配布と伝統工芸に親しむ体験学習（ワークショップ）の開催を柱として実施した。



学校教育連携事業 体験学習（ワークショップ）（岡山会場）



香川会場ポスター



岡山会場ポスター



展覧会図録表紙



## 2 展覧会

### (i) ポスター・図録の作成

展覧会ポスターの作成にあたり、両館で展示資料から代表的な作品を選定した。香川県側からは漆芸の磯井如真「双色紙筥 喜鵲之図」、岡山県側からは金工の正阿弥勝義「雛巢釣花瓶」を核にデザインをすすめた。展覧会の形式が巡回交流展であり、両館で会期が異なるため、各会場での開催時期のイメージを膨らませ、香川会場では白を基調とした案、岡山会場では会期になる晩秋を想像させる案をもとにデザインを決定し、チラシ・ポスターを作成した。展覧会図録についても両館の学芸員が共同で執筆・編集した。

### (ii) 展示

#### < 準備から展示リストの確定まで >

展覧会については、2年あまりの準備期間を経たが、交換展示の準備のために打合せを始めた平成18年度から本年度のテーマである「備讃の工芸」という大枠は決定していた。ただし、どのような視点で工芸をとらえるか、また、両県の結びつきや関連性をどのように展覧会に組み込んでいくかの諸課題があり、幾度も検討を重ねていった。その結果としてまず、両県を代表する工芸として、岡山県の備前焼、香川県の漆芸を柱とすることは合意した。しかし、工芸分野ごとに歴史的な流れが異なり、共通した項目を見いだすのは困難であった。検討の結果、章立て別に展示構成をするが、展示は工芸分野別にまとめる方向で進めることにした。次に、章立てをどのように構成するかということが課題となった。その際、キーワードとなったものが、「技 (craft)」、「業 (product)」、「創 (art)」という言葉であった。このキーワードを下敷きにし、それぞれの時代ごとの性格をとらえ、それを踏まえた上で構成をすすめた。展示内容については、それぞれの出品資料を検討・選定していくことと同時に、両県の工芸の歴史に影響を与えた事項にも触れる必要があると考え、明治時代の輸出工芸に関する資料や人的交流の部分についても研究を重ねた。

展示の起点を設定する際に、展覧会の柱である岡山県の備前焼、香川県の漆芸に注目した。香川県の漆芸の基礎をなした時期は幕末である。一方、岡山県の備前焼は平安時代末に起源をもつ焼物であるが、900年に及ぶ歴史の中で盛衰を重ねてきた。現在は、岡山県を代表する工芸品として著名であるが、その隆盛の直接の起点となる時期が幕末である。以上から、展示の起点を幕末に設定した。

最終章は現代の作品を多く取り上げた。両県の重要無形文化財保持者（人間国宝）の作品以外にも、現代作家の作品を多く紹介することで、現在にいたる工芸の流れが分かりやすいように意図したためである。



香川会場 展示風景



岡山会場 展示風景

資料の借用については、費用的なことも考慮の上、公立の機関を中心に最初の調査を進めた。県外借用については、岡山・香川両県で、展覧する機会の少ない優品を中心に検討を重ねた。その結果、東京国立博物館、東京国立近代美術館、東京藝術大学、京都国立近代美術館から作品を出品していただくことになった。一方、県内借用については、公立機関のほか、個人所蔵者からも多くの作品の出品協力をいただいた。結果として、資料点数は200点を超えた。最終的には両館の展示スペースの都合などから展示点数を調整し、展示構成・レイアウトを決定した。隣県でありながら目にすることがない工芸品を紹介するという視点もふまえ、各館で150点前後の出品で調整した。こうしてすべての出品リストが固まり、図録作成（執筆・写真撮影・写真借用）、資料借用等の準備に入った。

#### < 展示概要 >

幕末から明治、そして現在に至る間に、私たちの生活様式はもとより、生産・流通・経済、そして価値観や美意識はめまぐるしく変化してきた。その間、岡山県の陶芸や香川県の漆芸といった伝統工芸は“産業技術から美術工芸へ”と移り変わってきた。

明治維新とともに失職した藩お抱えの職人の中からは、その高い技術で、美術工芸作品を制作する人が現れた。国内外の博覧会への出品をとおして、彼らの技術は高い評価を受けた。本展覧会では、陶芸・金工・漆芸・花筵など博覧会で高い評価を受けた日本の技と美を紹介するとともに、その後の幾多の苦難や障害を乗り越え、現在活躍する作家へと継承されてきた技を紹介することで、郷土の歴史・文化を振り返った。

#### < 展示構成 >

展覧会では全体を4部構成として組み立てた。

第1章は「幕末の工芸」と題し、各県のテーマは、香川県は「讃岐漆芸の祖・玉楮象谷」、と岡山県は「多様化する備前の技（低迷と模索）」とした。この章では、香川漆芸の開祖とされる玉楮象谷について取り上げ、象谷の代表的な作品を紹介するとともに、備前焼では幕末から明治初頭にかけての細工物の優品を紹介し、伝統工芸としての基礎をなした時代を振り返った。

第2章は「博覧会の時代」と題して、藩お抱え職人の技と、輸出産業として成立をする工芸品の数々を紹介した。主な柱としては玉楮象谷の系譜、金工の正阿弥勝義、逸見東洋（木竹彫刻・堆朱）、陶芸の真葛長造と宮川（真葛）香山、錦莞筵の磯崎眠亀を取り上げ、漆芸、備前焼のみでなく多岐にわたる分野の資料を通して、工芸品の新たな方向性と国内外で絶賛された技と美を紹介した。

第3章では「工芸作家への道」とし、副題を「工芸芸術の復興と美の創造」とした。香川県工芸学校（現高松工芸高等学校）の創設や倉敷の民芸運動、そして両県の工芸界で、中興の祖とされる磯井如真（漆芸）、金重陶陽（備前焼）を紹介し、同時代に活躍した作家の作品も取り上げながら、現代へつながる技と、工芸の再興の時代をたどった。

第4章では「伝統工芸の継承者たち」として、技を現代へ受け継ぐ作家の足跡をたどりながら、重要無形文化財保持者（人間国宝）をはじめとする作家たちの作品を中心に紹介した。あわせて、技の伝承を支える素材や道具にも目を向け、保存技術見本や、備中漆の復興なども紹介した。

#### < 関連事業 >

展覧会に合わせ、各会場での講演会、工芸作家によるギャラリートーク（特別解説）、ボランティアガイド、両館学芸員による展示解説、そして体験学習（ワークショップ）の開催と多くの関連事業を展開した。伝統工芸に関しては根強いファンが多く、解説について熱心に耳を傾け、作品の美と歴史を堪能していただいた。体験学習（ワークショップ）に参加した子どもたちは熱心に作品づくりを行い、合わせて展覧会も興味深く見学した。

香川会場の会期は平成20年10月4日（土）から11月9日（日）の実質32日間、特別展示室を会場とした。岡山会場の会期は、平成20年11月14日（金）から12月14日（日）の実質27日間、平

常展で使用している第一・二展示室を会場とした。各会場の入場者数は、香川会場 4,346 名、岡山会場 3,855 名であった。

来館者からは、「ポスターのデザイン、展示内容がよかった」や「岡山・香川両県にこんな素晴らしいものがあるとは」、「もっと地元の工芸に触れる機会があればよいのに」などの声があり、両県の工芸とその歴史に対する関心の高さがうかがえた。また、岡山県では県立美術館で開催された日本伝統工芸展と同時期の開催であり、多くの広報誌などで紹介された。

### 主な展示資料

作品名	作者	年代	所蔵
彩色蒔醤 水指棚	玉楮象谷	嘉永 6 年 (1853)	高松市美術館
彩色蒔醤 料紙硯匣	玉楮象谷	嘉永 7 年 (1854)	香川県立ミュージアム
青備前 鶏置物	金重煤陽	明治時代	個人
虫明焼 菊絵菓子鉢	清風与平	江戸時代	瀬戸内市
「温知図録」		明治時代	東京国立博物館
起立工商会社図案		明治時代	東京藝術大学
牡丹蝶堆黒菓子器	玉楮藤樹	明治 14 年 (1881)	東京国立博物館
蒔醤 鼓箱	藤川黒斎	明治時代	香川県立ミュージアム
雛巢釣花瓶	正阿弥勝義	明治 32 年 (1899)	岡山県立博物館
色入菖蒲図花瓶	初代 宮川香山	明治 30 ~ 45 年 (1897 ~ 1912) 頃	東京国立近代美術館
双色紙筥 喜鵲之図	磯井如真	昭和 16 年 (1941)	香川県立ミュージアム
双魚衝立	北原千鹿	昭和 7 年 (1932)	東京国立近代美術館
備前耳付水指	金重陶陽	昭和 33 年 (1958)	東京国立近代美術館
備前広口壺	藤原 啓	昭和 56 年 (1981)	井原市立田中美術館
蒔醤存清 林間飛翔 箱	磯井正美	昭和 60 年 (1985)	香川県立ミュージアム
籃胎蒔醤 盛器 「熱帯魚」	太田 儔	昭和 61 年 (1986)	香川県立ミュージアム
備前黒角皿	伊勢崎 淳	平成 17 年 (2005)	東京国立近代美術館
乾漆堆錦箱 「古陵想」	山口松太	平成 11 年 (1999)	文化庁
存清技術記録	香川宗石	昭和 28 年 (1953)	東京国立博物館



香川会場 学芸員によるミュージアムトーク



岡山会場 学芸員による展示解説

関連事業（香川会場）

事業名	実施日
講演会 「野蠻な私たち」 秋田公立美術工芸短期大学学長 樋田豊次郎氏	平成 20 年 10 月 25 日（土）
工芸作家によるギャラリートーク（特別解説） 北岡省三氏（漆芸作家）	平成 20 年 11 月 3 日（月・祝）
ボランティアガイド	平成 20 年 10 月 19 日（日） 11 月 2 日（日） 11 月 9 日（日）
学芸員によるミュージアムトーク	平成 20 年 10 月 5 日（日） 10 月 12 日（日） 10 月 26 日（日）
ワークショップの実施 蒔番体験	会期中 8 回
ミュージアムコンサート	平成 20 年 10 月 17 日（金）

関連事業（岡山会場）

事業名	実施日
記念講演会 「歴史の中の備讃の工芸」 東京国立近代美術館工芸課長 金子賢治氏	平成 20 年 11 月 24 日（月・振休）
工芸作家によるギャラリートーク（特別解説） 山口松太氏（漆芸作家）	平成 20 年 11 月 29 日（土）
ボランティアガイド	平成 20 年 11 月 16 日（日） 11 月 30 日（日） 12 月 7 日（日）
学芸員による展示解説	平成 20 年 11 月 8 日（土） 11 月 22 日（土） 12 月 13 日（土）
ワークショップの実施 備前焼陶芸体験	会期中 4 回
復元錦菟蒔織機の実演	平成 20 年 11 月 16 日（日） 12 月 7 日（日）



香川会場 講演会後の解説（樋田豊次郎氏）



岡山会場 記念講演会（金子賢治氏）



香川会場 特別解説（北岡省三氏）



岡山会場 特別解説（山口松太氏）

### 3 ボランティア

#### (i) ボランティア交流会

##### < 3 年目の新たな取組み >

交流事業は 3 年目、集大成の年を迎えた。これまでの取組みが評価され、ボランティア事業は平成 20 年度文化庁芸術拠点形成事業（ミュージアムタウン構想の推進）に採択された。その関係で両県の

ボランティア交流会は、展覧会が早まったにもかかわらず、立ち上げが6月1日と遅いスタートとなった。

また、香川県側は香川県立ミュージアムと改称、香川県文化会館の美術部門と統合し、ボランティアも新たなメンバーを迎えた。岡山県側は、博物館友の会の中にボランティア部を設け、会長の委嘱、リーダーの選出等確固たる組織の位置づけを行った。

交流最終年の展覧会は、合同企画展で、巡回展形式である。ボランティアガイドも相手県で自県の資料を解説するような従来の方法ではない新しい取組みが模索され、双方が同等にガイドを行うこととなった。さらに、展示内容が工芸分野の多岐にわたることで、勉強会のあり方からガイド方法まで、新たな方策が議論された。分野別に勉強して展示資料別にガイドを行う方法等も話し合われた。結局、両県の工芸を幅広く学ぼうということになり、来館者にガイドが寄り添う方法は踏襲することとなった。なお、今回は文化庁の助成でボランティアジャンパーを作成し、全員で着用しガイドを行った。

#### < 交流会 >

展覧会までに8回の交流会を重ねた。そのうち開催時の学芸員展示解説を含めた勉強会を6回、現地見学会を3回(1回は勉強会と同日)行った。

第1回交流会では、両県ボランティア・リーダーが進行するボランティア会議を行い、自己紹介やこれまでの体験、今回の抱負などを話し合った。ボランティアからは、「分野が多岐にわたって大変そう」「勉強するための資料を早く準備しなければ」「来館者目線で学芸員とは一味違ったガイドをしたい」などの声が聞かれた。次の交流会は、工芸に携わる方のお話や各制作場面に触れ、匠の技を見聞する現地見学会を2回計画した。見学地が岡山県内のみで、しかも遠方の真庭市蒜山もあったが双方とも予想を超える参加希望があり、蒜山の見学会は、抽選で参加者を定める事態となった。後の香川漆芸研究所の現地見学会を含め、目の前で繰り広げられる漆掻きや讃岐漆芸の三技法などに参加者は驚きと感動を得、後の勉強会への意欲が高まったようである。勉強会は、出品作品にテーマを設けて学芸員が説明した。県外借用資料の決定が遅れ十分な解説ができなかったり、提供する資料の内容に不備があったりと問題点もあった。また、今年度は展覧会終了後も2回の交流会を行い、本書及びボランティア事業活動報告書の作成に取組み、合わせて3年間の交流の意義や今後の交流について話し合った。その中で、これまでの交流を途絶えさせることなく、ボランティアが主体となって個人間や館を通じての情報交換等続けること、また来年度以降一回ずつ相互に訪問することが決まった。

#### (ii) ボランティアガイド

展示ガイドは、双方で5～7名のボランティアが参加して両県の会場で3回ずつ実施した。岡山県側ボランティアは、交代でガイドを行ったが、香川県側ボランティアはほぼ同メンバーで、勉強会参加人数がガイド人数につながらないという課題も生まれた。時間は前年度の要望から、11時～15時と延長した。会場の広さ、出品数も過去2年間の約2倍で、一回りするのに相当の時間・労力を要した。ボランティアの奮闘ぶりには感謝の念でいっぱいである。

今年度は過去2年間の反省を生かし、ボランティアに対する意識の高揚、より主体的な交流活動に一定の成果をみる事ができた。また、ボランティアとしての姿勢、言葉や服装など基本的なことに今一度話が及んだ。そして、よりよいガイドのためには、博物館から与えられたものを学ぶだけでなく、個人個人の勉強がやはり大切であるという声、そしてそれを続けるには一緒に切磋琢磨したり励まし話し合ったりできる仲間の存在が大きいという声が寄せられた。この3年間のガイドの経験、両県の交流が今後のより深化した交流とボランティア活動に生かされるよう館としても努めていく必要がある。



## ガイド日程と参加人数

日 時	場 所	岡山参加者	香川参加者
10月19日(日) 11:00～15:00	香川県立ミュージアム	7	5
11月 2日(日) 11:00～15:00	香川県立ミュージアム	7	5
11月 9日(日) 11:00～15:00	香川県立ミュージアム	7	5
11月16日(日) 11:00～15:00	岡山県立博物館	5	5
11月30日(日) 11:00～15:00	岡山県立博物館	4	5
12月 7日(日) 11:00～15:00	岡山県立博物館	6	5



ボランティアジャンパーを着用してのガイド

## ボランティア交流会の概要

日 時	内 容	場 所	岡山参加者	香川参加者
6月 1日(日) 13:00～15:30	交流会① 勉強会Ⅰ 展覧会概要 ボランティア会議	岡山県立博物館	14	16
6月15日(日) 8:00～17:30	交流会② 現地見学会Ⅰ 倉敷市立磯崎眠亀記念館 大原美術館	岡山県倉敷市	22 ボラカイト <sup>※</sup> 11	25
7月13日(日) 7:30～18:00	交流会③ 現地見学会Ⅱ 漆掻き実演 郷原漆器の館	岡山県真庭市	28 ボラカイト <sup>※</sup> 13	22
8月 6日(水) 13:00～15:30	交流会④ 勉強会Ⅱ 香川の工芸のあゆみ	香川県立ミュージアム	12	16
8月31日(日) 13:00～15:30	交流会⑤ 勉強会Ⅲ 岡山の工芸のあゆみ	岡山県立博物館	12	16
9月18日(木) 13:00～15:30	交流会⑥ 現地見学会Ⅲ 勉強会Ⅳ 香川県漆芸研究所 出品資料解説	香川県高松市 香川県立ミュージアム	15	25
10月 4日(土) 10:00～12:00	交流会⑦ 勉強会Ⅴ 香川会場開展式 ガイド研修	香川県立ミュージアム	13	21
11月14日(金) 10:00～12:00	交流会⑧ 勉強会Ⅵ 岡山会場開会式 ガイド研修	岡山県立博物館	13	6
12月10日(水) 13:00～15:30	交流会⑨ 反省会Ⅰ 活動報告書作成	岡山県立博物館	10	4
1月25日(日) 13:00～15:30	交流会⑩ 反省会Ⅱ 活動報告書作成	香川県立ミュージアム	9	6

(iii) ボランティアによる体験学習(ワークショップ)の支援  
学校教育連携事業として両館で開催した体験学習(ワークショップ)の実施にあたり、ボランティアが支援を行った。香川会場の「漆芸の体験学習」では計12名、岡山会場の「陶芸の体験学習」では計8名が、会場設営や道具の準備、片付けなどを行った。限られた時間の中、多数の児童を受け入れたが、ボランティアの協力により、スムーズに事業を実施することができた。



ボランティアによる体験学習の支援(岡山会場)

## (iv) ボランティアガイドの声(香川)

今回のボランティア交流会により、私どもの視野が、一気に広がりました。備讃の伝統文化に触れることを通じて、瀬戸内海を挟む両県の距離がいつそう近くなったと感じます。瀬戸大橋の完成から20年を経て、両県の絆がますます強くなっていくことを実感いたしました。今回の企画を通じて感じたことを幾つか挙げてみます。

- ① 3回の企画展を通じて、30回近い交流会が用意された。事前のオリエンテーションにより今回の企画の目標の徹底が図られ、両県からの参加メンバーの意志がひとつになった。また、両県の見学会でのボランティア同士の交流が、相互の親交を深めた。

- ② これまでは常設展示の歴史的側面の解説しか経験がなかったが、今回の企画により、香川県の伝統文化に深く触れることができた。同時に、今まで親しむ機会が少なかった岡山県の備前焼、刀剣などを知ることができ、日本文化の地域特性の一端が理解できた。
- ③ 両県のボランティアは、それぞれ異なった経緯を経て、今回の企画に参加することになったが、共通の興味をもつ人々であるため、すぐに親しくなることができた。勉強会などの交流を通じて個人的な交流が生まれたのも成果の一つであった。
- ④ 来館者の方々に、もっと気軽にボランティアの解説を受けていただく仕組みを考えられないかと反省させられた。ボランティア側としては、勉強したことを、見学客のお役に立てたいと思うが、お客様にはそれぞれの立場があり、必ずしもサービスの実施が円滑に行かないことがあった。後の工夫が望まれる。



両館のボランティア交流は、地域間の文化交流としてよいモデルになったのではないのでしょうか。この経験を何らかの形で、将来の発展につなげたいと感じました。

(香川県立ミュージアム解説ボランティア 中村昶三)

#### (v) ボランティアガイドの声 (岡山)

平成18年度から3年計画で、岡山県立博物館と香川県立ミュージアム(旧香川県歴史博物館)が連携しての展覧会が開催され、ボランティア交流会も立ち上がりました。あつという間の3年間で過ぎ去った今、振り返ってみると、色々な行事を思い出します。基本的な勉強会の数々、展示に関連する現地見学会、そして展覧会での来館者へのガイド。これらを通して両県の交流を深めていき、現在もその交流は続き、深まりをみせています。

折々の現地見学一屋島へ、備前焼の里へ、栗林公園へ、備前長船刀剣博物館へ、大原美術館へ、郷原漆器の館へ、これらの見学を通しての交流は、バスの中で生まれ、あるいは行程の全体の中で行われ、今では強いつながりになったと思っています。

そして、この交流がそれぞれの方々の生涯において、今までにない貴重な経験となり、視野を広げていくきっかけになったのではないのでしょうか。

展示ガイドを通して、ボランティアは色々な体験をしてきました。来館者との交流や展示品を通して私たち自身が教えられた事柄も多く、また、多くの方から私たちに感謝もしていただきました。中でも私たちの説明の仕方もさることながら、来館者の方々の言葉を上手に聞くことの大切さも教えられました。

ガイドは一人が通して解説しましたが、リレー式にそれぞれが専門の部分の解説をしてはどうだろうかとも思います。3年間を終えて、ボランティアのあるべき姿や、養成のあり方についても考える時期にきているのではないかと思います。

展示ガイドについては、今までおおまかな考え方でいきましたが、貴重な経験をさせてもらい、ここから新しい展開が期待されそうです。ひとくぎりがつき、ホッとしている現在です。

(岡山県立博物館ボランティア 岡崎敬郎)



## 4 学校教育連携

学校教育との連携事業については、全国的にもモデルケースになると評価され、平成20年度文化庁芸術拠点形成事業（ミュージアムタウン構想の推進）に採択された。

### (i) 鑑賞ガイド

#### <事業概要>

展覧会の実施に合わせて、伝統工芸品の鑑賞を通じて地域の歴史や文化に親しんでもらうための学習教材として、香川・岡山両県の伝統工芸鑑賞ガイドを作成した。仕様はA3判二つ折の両面カラー印刷で、表裏に香川県の漆芸と岡山県の備前焼について、イラストや写真を使ってわかりやすく紹介している。4万部を印刷し、主な配布対象は「社会」で伝統工芸について学び、「図画工作」で作品鑑賞を学ぶ両県の小学4年生全員とした。展覧会開催に先行して9月に、香川県内の計190校、岡山県内の計432校へ配布し、さらに、小学校長会及び小学校教育研究会の社会科部会や図画工作部会などで紹介して、学校教育での活用を呼びかけた。また、展覧会開催中は、小・中学生の展示見学や体験学習（ワークショップ）の際に、補助資料として利用した。



鑑賞ガイドを手に展覧会を見学する児童（岡山会場）



鑑賞ガイドを使った備前焼の学習（岡山会場）



香川の伝統工芸鑑賞ガイド「漆芸を学ぼう」



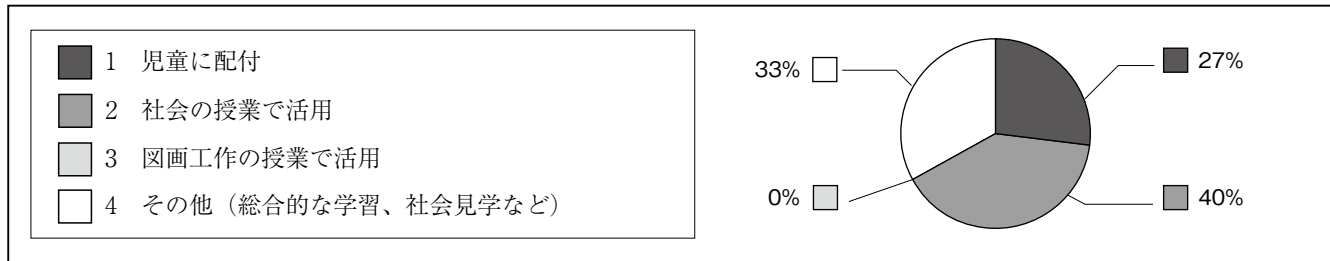
岡山の伝統工芸鑑賞ガイド「備前焼を学ぼう」

< アンケート結果 >

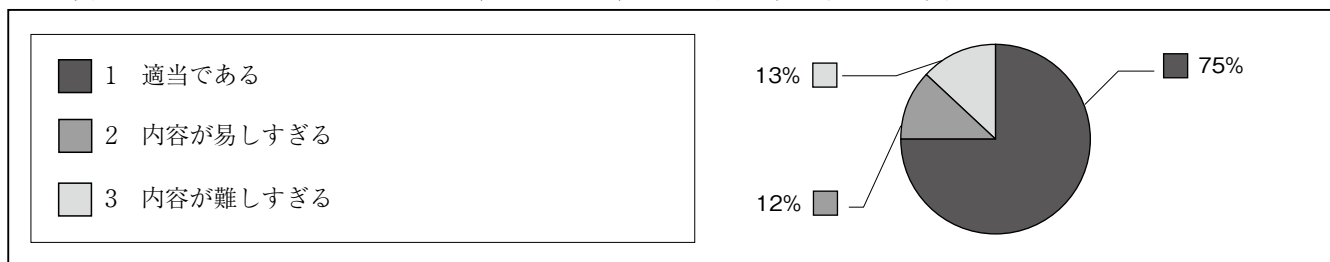
鑑賞ガイドの配布に合わせ、配布校にアンケートを実施し、全体の1割弱から回答が得られた。質問内容と回答結果は、次の通りである。

「伝統工芸鑑賞ガイド」アンケート回答結果

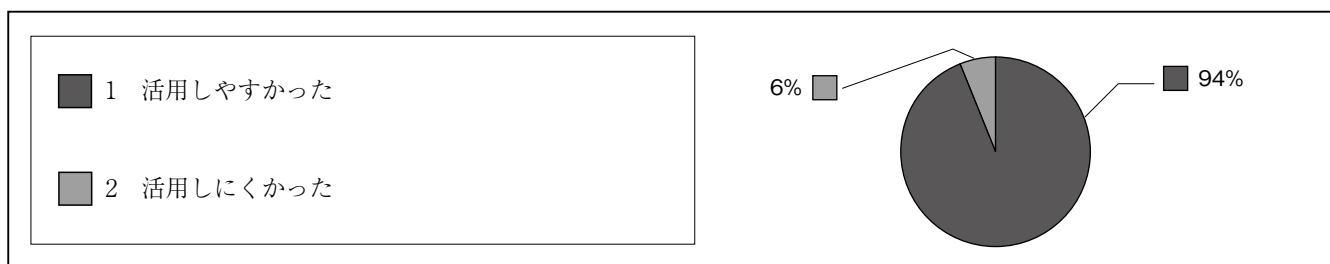
● 鑑賞ガイドはどのように活用されましたか。



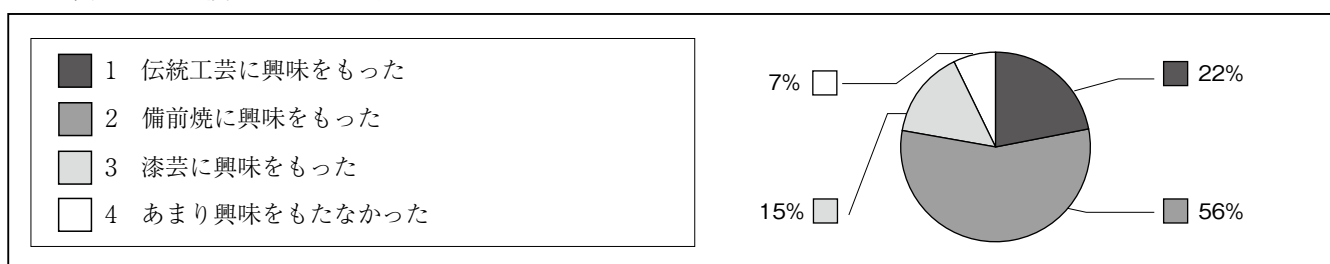
● 鑑賞ガイドの内容はどうでしたか。（複数回答可） ※香川県内学校のみ質問



● 鑑賞ガイドは授業で活用しやすいものでしたか。（複数回答可） ※岡山県内学校のみ質問



● 鑑賞ガイドを使った児童の様子はいかがでしたか。



< 事業成果と今後の課題 >

アンケートでは、讃岐漆芸や備前焼について写真やイラストでわかりやすく説明してあり、利用しやすかったという意見が多く寄せられた。また、内容もおおむね適当で、子どもたちが伝統工芸に興味をもつきっかけになったようである。伝統工芸のような専門的な内容を学習するための、利用しやすい教材が教育現場から求められており、その期待にある程度応えることができたといえよう。課題として、本事業では、この鑑賞ガイドで伝統工芸を事前学習した後、展覧会での作品鑑賞につなげてもらいたいと考えていたが、ほとんどの小学校では伝統工芸を授業で扱うのが3学期以降であり、展覧会を学習の場として利用してもらうことが十分にはできなかった。こうした反省点を踏まえつつ、学校教育と博物館事業の連携がより有意義で充実したものになるよう、今後も取組みを続けたい。

(ii) 体験学習（ワークショップ）

< 香川会場「漆芸の体験学習」>

香川県立ミュージアムでは、香川県の伝統工芸である讃岐漆芸の技法の一つ「蒔<sup>きんま</sup>醬」の体験学習を5日間にわたり実施し、香川県内12校から310名の小・中学生が参加した。講師は漆芸作家に依頼し、各日4～5名に指導していただいた。教材として、漆手板と蒔醬剣、各色の塗料（漆の代用品）を用意した。講師から讃岐漆芸の歴史や技法について説明を受けた後、児童・生徒たちは蒔醬剣を使って慣れない手つきで思い思いに線を彫りこんでいった。1時間30分ほどで色あざやかな作品が完成し、当日持ち帰ってもらった。合わせて、学芸員の案内で展覧会を見学し、讃岐の先人が生み出した伝統の技について理解を深めてもらった。

ワークショップの日程と参加児童・生徒数（香川会場）

月 日	参加校	学年	参加生徒・児童数
10月 8日（水）	三豊市立比地大小学校	3・4年生	34名
	高松市立男木中学校	1年生	3名
	高松市立龍雲中学校	2年生	10名
10月23日（木）	さぬき市立石田小学校	5年生	32名
	高松市立新塩屋町小学校	5年生	32名
10月28日（火）	高松市立庵治小学校	5年生	35名
	高松市立太田中学校	2年生	4名
10月31日（金）	東かがわ市立相生小学校	4・5年生	38名
	坂出市立府中小学校	5年生	38名
11月 7日（金）	坂出市立金山小学校	4年生	34名
	さぬき市立多和小学校	4～6年生	10名
	まんのう町立琴南小学校	4・5年生	40名
計			310名

< 岡山会場「陶芸の体験学習」>

岡山県立博物館では、岡山県の伝統工芸である備前焼（陶芸）の体験学習を4日間にわたり実施し、岡山県瀬戸内市・備前市の7校から、285名の小学生が参加した。講師は備前焼伝統工芸士のべ12名に依頼し、各日3～4名に指導していただいた。教材として一人ずつに陶芸用粘土600gとロクロを用意した。所用時間は約1時間30分で、講師による陶芸の説明と実演の後、粘土を手づくねで作品の形にする「形づくり」に取り組んでももらった。あわせて、学芸員の案内で展覧会や岡山後楽園を見学し、岡山の歴史と文化について理解を深めてもらった。作品は窯元で焼成してもらった後、各学校にお届けした。あざやかな焼き色のついた自分だけの焼き物を手にして、児童たちは大喜びだった。

ワークショップの日程と参加児童数（岡山会場）

月 日	参加校	学年	参加児童数
11月28日（金）	瀬戸内市立行幸小学校	4年生	87名
12月 2日（火）	瀬戸内市立美和小学校	4年生	12名
	瀬戸内市立国府小学校	4年生	47名
12月 3日（水）	備前市立東鶴山小学校	3～6年生	37名
	備前市立日生南小学校	2・4～6年生	7名
	備前市立日生東小学校	4年生	27名
12月 4日（木）	備前市立日生西小学校	3・4年生	68名
計			285名



<香川会場「漆芸の体験学習」> 当日の様子



漆芸作家による漆芸の講義



下絵を手板に写して蒔番剣で彫る



彫った溝に色を埋めて乾燥させる



艶がでるまで表面を磨いて仕上げる

<岡山会場「陶芸の体験学習」> 当日の様子



備前焼伝統工芸士による実演指導



ロクロの上で粘土を作品の形にしていく



形ができた作品にサインをいれる



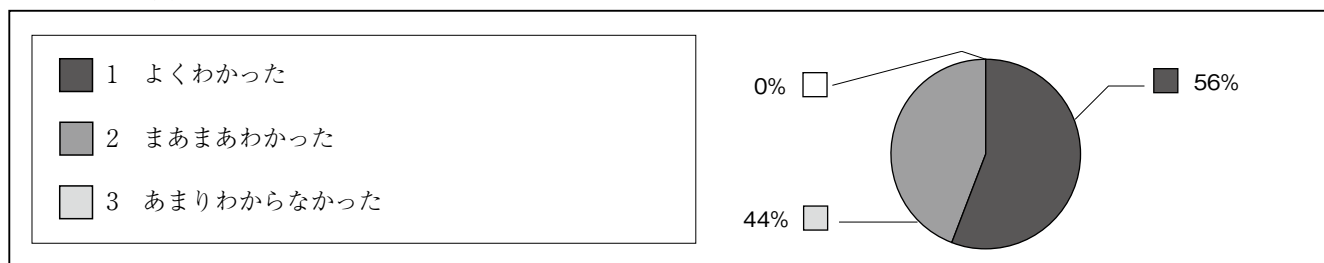
窯元で焼成された作品の贈呈

< アンケート結果 >

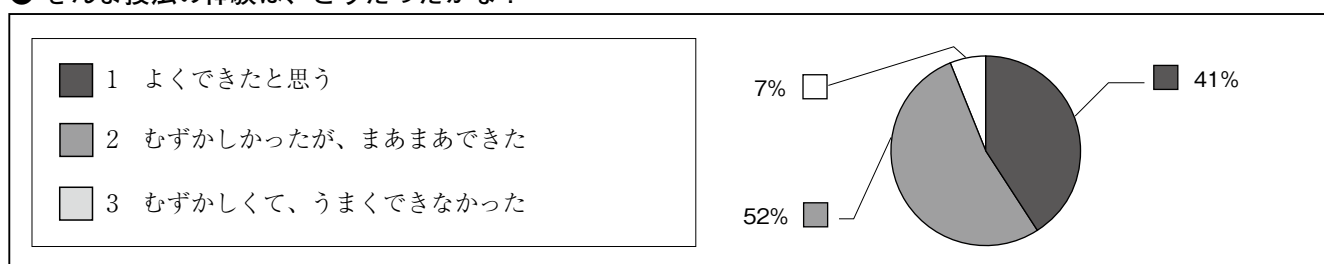
体験学習のアンケートを岡山・香川両会場それぞれ実施し、参加者のほぼ全員から回答が得られた。質問内容と回答結果は、次の通りである。

「漆芸・陶芸の体験学習」アンケート回答結果

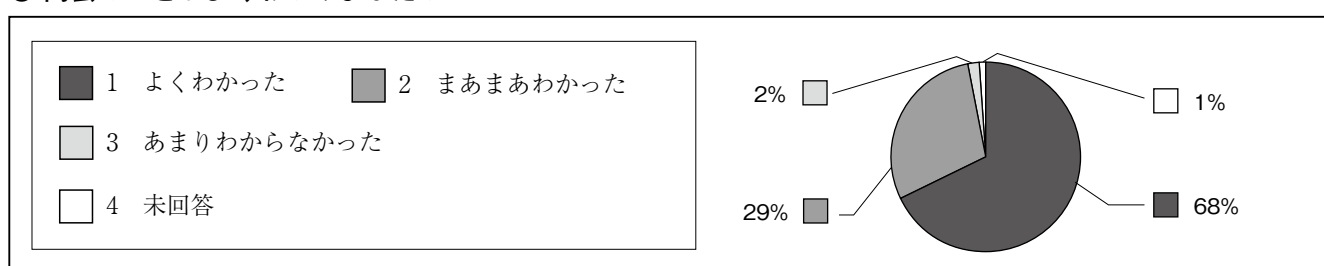
● 香川の漆芸のことはわかったかな？



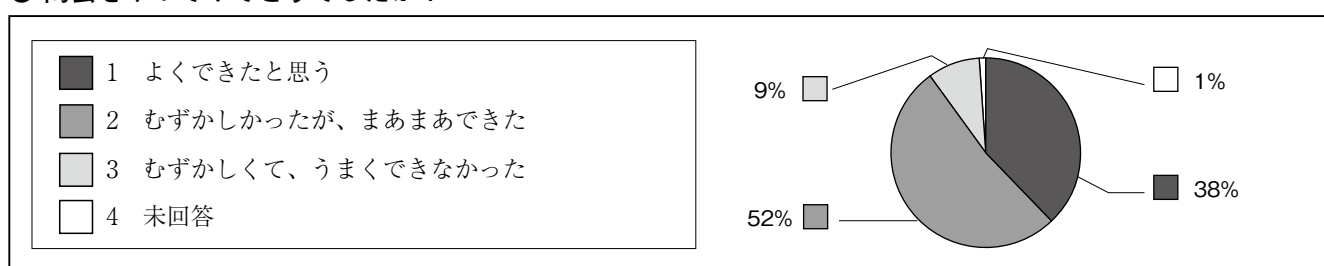
● きんま技法の体験は、どうだったかな？



● 陶芸のことがよくわかりましたか？



● 陶芸をやってみてどうでしたか？



< 事業成果と今後の課題 >

今回の体験学習は、展覧会の内容と連動して、香川県の漆芸と岡山県の備前焼（陶芸）をテーマとした。両者とも内容が高度で特殊な道具や技術が必要なものであり、実物資料を所蔵し、作家との連携も可能な博物館だからこそ実施できた事業といえよう。ほぼ全員の参加者から、漆芸や陶芸について知識や興味が深まったというアンケート回答が得られ、鑑賞と体験を組み合わせた学習が効果的であることを示している。また、博物館としても新たな教育プログラムの開発や人的ネットワークの構築に成果があった。課題として、約1割の参加者から制作が難しかったという意見があった。内容的にやや難易度が高かったこともあるが、教材や指導内容の改善により対応できる部分もあり、今後もより充実した体験学習ができるよう検討を重ねたい。

## 第3章 成果と課題

### 1 成果

#### (i) 展覧会

3年間の交流事業を実施するにあたり、両館で展示計画や関連事業の具体化など事業実施に向けた実質的な協議を積極的に進めた。そうした中、各館を代表する収蔵品である岡山県の備前焼・備前刀と香川県の高松松平家の名宝の交換展示や両県を代表する伝統的な工芸品を取り上げた巡回展示で、両県の歴史や文化に対する理解を深めることになった。また、相互の県で自県の反応や意見を知ることにより、それぞれが自分たちの地域文化について再認識したり再評価する機会となった。また、3年間の積み重ねや交流により両県の歴史や文化へ対する理解を深めるとともに、両県の魅力を全国に向けて情報発信することができた。また、博物館を核とした岡山・香川両県の交流や連携が深まり、地域の文化振興にも寄与することができた。

#### (ii) ボランティア交流事業

両館の博物館ボランティアが勉強会や現地見学会による交流会を重ねたことで、両県の歴史や文化に対する理解が深まり、相互理解を深めた。また、活動を重ねる中で個々の交流が始まり、親交を深めたことも大きな成果であり、人の交流が大きく進んだ。こうした交流の積み重ねが、今後の両県の交流促進の核となっていくことが期待される。

本事業がそれぞれの館のボランティア活動に生かされ、組織の充実につながることで、両館の交流もさらなる深化の方向へ進むことも期待される。

#### (iii) 学校教育連携事業

平成20年度は両県の伝統工芸を取り上げた展覧会を開催したが、それに合わせ学校教育との連携を図るため、子どもたちを対象に鑑賞ガイドを配布するとともに、体験学習を行った。将来の郷土文化の担い手である子どもたちに本物の文化財にふれあう機会や情報を提供することにより、郷土や隣県の歴史と文化への理解を深めてもらうことができたことは、大きな成果であった。

### 2 課題

今後の博物館運営には、多くのボランティアや地域社会と協働の事業運営や複数の館の相互連携活動が必要である。この交流展の取組みで培ってきた相互理解の絆をさらに深めていくために、事業終了後も両県相互の継続的な交流の推進を検討する。また、3年間継続して学習し、知識を深めた両館ボランティア活動の場の確保や充実に努めていくことも重要である。さらに、今回の取組みによって得られた多くの知識や技術の蓄積を活用し、隣県のみでなく広く全国の博物館のネットワークづくりに役立て、博物館の相互連携事業の推進に努めていく必要がある。

### 3 おわりに

全国的に博物館を取り巻く環境は大変厳しくなっている中、今回の取組みは博物館相互連携活動のモデルケースの一つである。事業実施にあたっては両県の財政状況、両館の人員配置や展示室の状況、また、館の設立の経緯や固有の事情など懸案は多く、相当のエネルギーを要したことは事実である。しかし、今回の交流展によって、両県民から博物館の活動が注目を集めたり、両館の職員の意識改革が進んだり、ボランティアの交流が深まるなど、大きな成果が生まれた。この取組みが、今後の博物館運営の在り方の一つの方向性を示すものと考えている。

岡山県立博物館職員名簿

平成 18 年度

館長	芦田 和正
副館長 (学芸課長事務取扱)	柳瀬 昭彦
総括参事 (総務課長事務取扱)	斉藤 歳昭

総務課

主任	中川 清
主事	武本 有加
主事	中島 慎一
主任運転技術員 兼主任校務技術員	田中 壽夫

学芸課

学芸員 (副参事)	中田利枝子
学芸員 (主任)	鈴木 力郎
学芸員 (主任)	浅野慎太郎
学芸員 (主任)	信江 啓子
学芸員 (主任)	佐藤 寛介

平成 19 年度

館長	芦田 和正
副館長 (学芸課長事務取扱)	柳瀬 昭彦
総括参事 (総務課長事務取扱)	松井 輝明

総務課

主任	中川 清
主事	中島 慎一
主事	牧田 千里
主任運転技術員 兼主任校務技術員	田中 壽夫

学芸課

学芸員 (副参事)	中田利枝子
主任	正木 茂樹
学芸員 (主任)	鈴木 力郎
学芸員 (主任)	浅野慎太郎
学芸員 (主任)	信江 啓子
学芸員 (主任)	佐藤 寛介

平成 20 年度

館長	芦田 和正
副館長 (学芸課長事務取扱)	平井 泰男
総務課長	井上 亨

総務課

主任	中川 清
主事	伊集院修代
主事	牧田 千里
主任運転技術員 兼主任校務技術員	田中 壽夫

学芸課

主幹	正木 茂樹
学芸員 (主幹)	鈴木 力郎
学芸員 (主任)	浅野慎太郎
学芸員 (主任)	信江 啓子
学芸員 (主任)	佐藤 寛介
学芸員 (主任)	河合 忍

香川県立ミュージアム (H 18・19 は香川県歴史博物館) 職員名簿

平成 18 年度

館長	北原 和利
副館長 (兼) 総務課長	徳田 辰夫
学芸課長	大山 眞充

総務課

副主幹	松崎日出穂
主任	宮崎 訓子
主任	豊嶋 千秋
主任	久保 享代

学芸課

主任専門職員	多田 昌浩
文化財専門員	古野 徳久
文化財専門員	佐藤 竜馬
専門職員	吉田 智
専門学芸員	胡 光
専門学芸員	野村 美紀
専門学芸員	松岡 明子
専門学芸員	渋谷 啓一
専門学芸員	三好 賢子
文化財専門員	松本 和彦
主任学芸員	上野 進
主任学芸員	高木 敬子
主任主事	小野 順子

平成 19 年度

館長	徳田 辰夫
副館長 (兼) 学芸課長	大山 眞充
総務課長	大西 洋

総務課

副主幹	松崎日出穂
主任	森下 玲子
主任	宮崎 訓子
主任	豊嶋 千秋
主任主事	白川 悟士

学芸課

主任専門職員	田井 静明
主任専門職員	多田 昌浩
文化財専門員	古野 徳久
専門職員	吉田 智
専門学芸員	胡 光
専門学芸員	野村 美紀
専門学芸員	松岡 明子
専門学芸員	三好 賢子
専門学芸員	御厨 義道
文化財専門員	松本 和彦
文化財専門員	小野 秀幸
主任学芸員	上野 進
専門学芸員	高木 敬子

平成 20 年度

館長	和泉 幸男
副館長 (兼) 学芸課長	真鍋 昌宏
総務課長	大西 洋

総務課

副主幹	松崎日出穂
主任	森下 玲子
主任	多田 昇子
主任	豊嶋 千秋
主任技師	吉田 進

学芸課

主任専門職員	寒川 義文
主任専門職員	田井 静明
主任専門学芸員	田口 慶太
主任専門学芸員	杉山 幸生
文化財専門員	古野 徳久
主任専門職員	吉田 智
専門学芸員	胡 光
専門学芸員	松岡 明子
専門学芸員	三好 賢子
専門学芸員	御厨 義道
専門学芸員	窪美西嘉子
文化財専門員 (兼) 専門学芸員	松本 和彦
文化財専門員 (兼) 専門学芸員	小野 秀幸
専門学芸員	上野 進
専門学芸員	高木 敬子
主事	白川 弘二

瀬戸大橋開通 20 周年記念事業  
岡山・香川合同企画文化交流展  
事業活動報告書 - 3 年間のあゆみ -

編集・発行

岡山・香川合同企画文化交流展実行委員会  
(事務局) 〒703-8257 岡山市後楽園 1 番 5 号  
岡山県立博物館内

TEL : 086-272-1149 FAX : 086-272-1150

発行日 平成 21 年 3 月 30 日

印刷 サンコー印刷株式会社





